麗しき四川の夏

雪宝頂登頂

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

麗しき四川の夏

雪宝頂（5,588m）登頂

日本ヒマラヤ協会
1991年雪宝頂登山隊

▲ＢＣ付近より雪宝頂を望む

▲ＢＣに集結した登山隊

◀稜線までのルートを俯瞰する

▶モレーンを登る

◀稜線より小雪宝頂方面を望む

▶もろい岩稜とC1

◀雪宝頂山頂を望む（手前岩稜の先のコルがC1）

▶頂上直下を登る

▲頂上での記念撮影▼

▲登攀終了後ＢＣにて

目　　次

序……遠藤　登　1

• 第Ⅰ部

登山報告

隊長あいさつ ― 登山を振り返って ― ……酒井　国光　5
雪宝頂秘話 ……山森　欣一　7
登山計画 ……8
行動概要 ……9
行動日誌　アプローチ ……12
　　登山活動 ……14
　　頂上を踏んで ……18
　　登山を終えて ……19

• 第Ⅱ部

隊員紹介 ……23

随想

目的かなわず ……酒井　国光　28
21世紀の日本と中国 ……山森　欣一　29
雪宝頂、敗退の記 ……江尻　健二　30
随想 ……三輪　力　35
登山を顧みて ……森山　安次　36
思い出 ……戸部　秀男　37
感想 ……平川　宏子　38
「これはまずい」と思って ……久保　均　39
初めての遠征登山 ……柏倉　秀克　40
たった8カ月前なのに ……中居　満穂　42
「hé tián yòu jiè」 ……合田　祐介　43
はじめての中国 ……山森　直樹　44

• 第Ⅲ部

隊務報告

登攀 ……森山　安次　49
装備 ……森山　安次　50
食糧 ……平川宏子・合田祐介　52
気象 ……中居　満穂　53
医療 ……戸部　秀男　54
庶務 ……三輪　力　56
ゴミ対策 ……江尻　健二　56
準備日誌 ……酒井　国光　57

編集後記 ……60

序

日本ヒマラヤ協会
会長　遠藤　　登

天府の霊峰　雪宝頂は、中国四川省北部に聳え立つ岷山山脈の最高峰の名山であります。1986年８月、ＨＡＪが四川省登山協会と合同登山をし、初登頂に成功した山であり、そのピラミダルな山姿は、真っ白な雪の衣をまとい実に美しいものです。地元の松潘の人々にも霊峰として古くから信仰の山であるとも聞いています。付近には中国第一級の自然保護区として知られる九寨溝や黄龍寺などの景勝の地もあり、この地を訪れたことのある人は、機会があれば再び訪れたいと思う地域でもあります。

このような地に1991年ＨＡＪは、第二回目の雪宝頂登山隊を派遣いたしましたが、酒井隊長以下13名が参加し、８名が登頂に成功するなど、すばらしい記録を残して無事登山は終了しました。

1986年の時は、合同登山ということもあって４週間の日程を組んで出かけましたが、今回は、3週間の日程で登山を成功させるなど、貴重な体験や資料を残してきており、今後の計画にも大いに役立つことでしょう。

1960年代、ヒマラヤの夢を台湾へ、と言って、台湾への登山が盛んに行われていた時代が思い出されます　当時は、外貨が思うように使えず、ヒマラヤなどに登ると言うのは夢の夢でしたが、より高きを求める気持ちの人々の努力は、70年代からのヒマラヤ登山等高峰での活躍に繋がったのではないでしょうか。

こんな意味からも今回の雪宝頂の登山は、ヒマラヤの登山を志向する者にとって大切な第一歩と位置付け、次なる高みを目指して活躍を期待するものであります。

今回の登山隊も中国のみなさん方とすばらしい交流を図り、親善を深めることが出来たと聞いておりますが、両国登山界の今後の交流親善のためにも意義ある登山だったと思います。出来ることならば、今後、五千、六千、七千の未知なる山々に交流登山が出来ることを願うものであります。

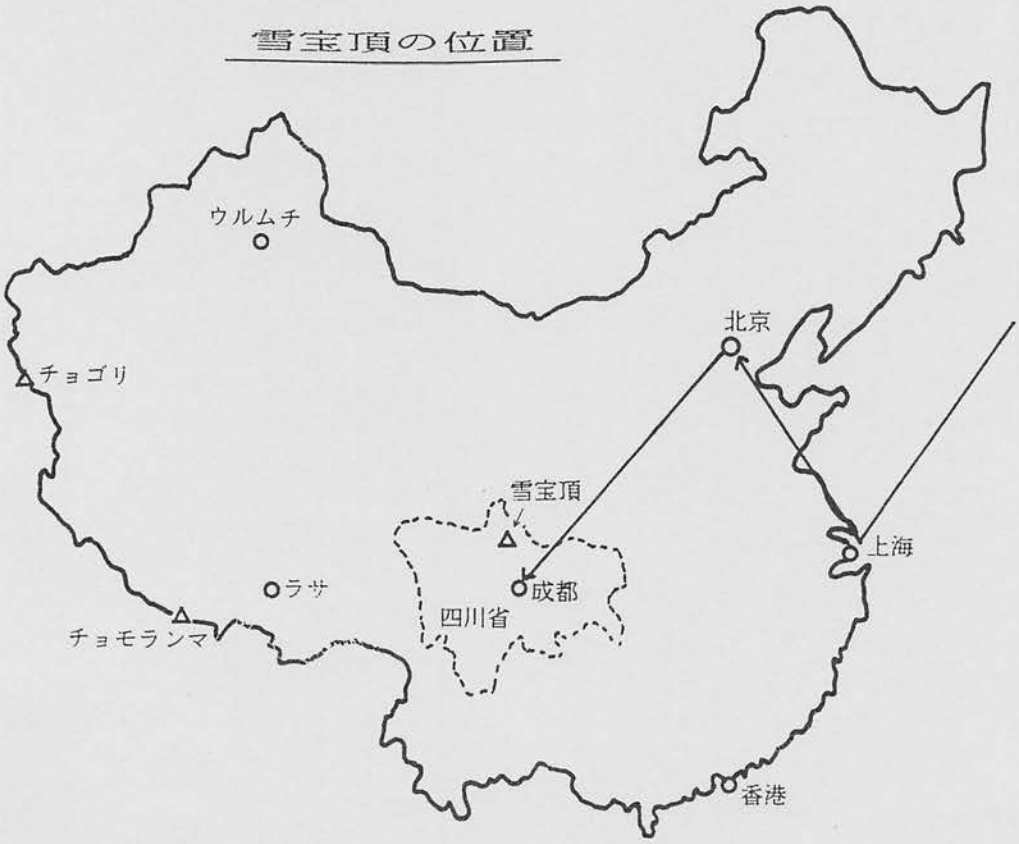
最後になりましたが、今回の登山の中国の関係各位の皆様方、そして国内のご支援くださった皆様方に厚く御礼を申し上げるとともに、今後ともご指導ご鞭撻をお願い申し上げご挨拶と致します。

1992年９月

第Ⅰ部

登山報告

・隊長あいさつ
・雪宝頂秘話
・登山計画
・行動概要
・行動日誌



隊長あいさつ
――登山を振り返って――

隊長　酒　井　国　光

「２週間程度の休暇の中で、ヒマラヤの高峰登山を楽しみたい！」これは、我々ヒマラヤ協会の会員にとっては切実な望みであろうと考えます。

昔から、「海外登山は、日本を出発できれば半ば成功」と言われていたことを肝に命じて感じていた私です。そこには、登山許可の問題、休暇の問題、金銭の問題、家族の同意の問題等々が横たわっています。その中で何が最大の障害であるかは、人それぞれの立場で異なるかとは思います。私の感じでは休暇の問題だと思っています。

今回の隊を企画するにあたっては、第一にその面を考慮しました。これは登山計画の「趣旨」に述べてあるごとくです。

隊の行動は計画のごとく進行し８名が登頂を果たし、全員無事帰国することができました。ここでは、隊の次の３つの目的に沿って、今回の登山を振り返ってみます。

(1)　「雪宝頂の登頂」について

13名中８名の隊員が登頂を果たしました。内訳は、年令的には20代、30代、40代、50代共各２人ずつであります。また、海外登山の経験の面から言うと、経験者、未経験者とも４人ずつでした。

登頂を果たせなかった５名について言及しますと、体調を崩しＢＣより松潘へ下った者２名、その隊員に同行して下らざるを得なかった者２名であります。成都からＢＣまで、１日も休まず、１度も高度を下げることなく入山したため、高度順応に時間がかかったように思います。

他の１名は、数日前から首を痛めていました。Ｃ１直前まで登りましたが、稜線の悪場の通過が困難と判断し、登頂を断念しました。

天気については、登山期間８日間のうち、全然雨が降らなかったという日は１日もないと言ってよいほどでした。

このような中、登山期間ギリギリの７日目と８日目の登頂であったことを考えますと、一応満足な結果であると言えます。

「２週間程度の休暇で雪宝頂登頂が可能か否か」これについては、今回の経験から「否」と結論付けたいです。勿論これは、十分に経験のある者がという意味ではなく、今回のように、経験の少ない、海外登山が初めての隊員を多く含む、ＨＡＪ登山隊を企画する立場からです。

(2)　「テイクイン・テイクアウトの徹底」について

その第一歩は、山に持ち込む物資を極力減らすことであります。この面で我々が努力をしたのは当然です。

山で出たゴミ類は、極力ＢＣでこまめに焼却しました。さらに、燃え残りの銀紙類や缶類は集めて、成都まで下ろしました。

生理現象のトイレについては、場所を限定し、使用したペーパーは決めた袋に入れることを義務付け、まとめて焼却しました。（これにつきましては、１度、まとめて入れておいた袋を、現地の人が袋ほしさに持って行ってしまったというハプニングもありました。）

固定ロープは、現地の若者がほしいと言うので、彼等の手で回収してもらい、プレゼントしました。

しかし、残念だったのは、馬工たち現地の人の焚火跡です。習慣の違いから、彼等は毎日、生木を燃やして暖を取っています。燃え残りの木が数多く残ってしまいました。

(3)　「青少年の野外活動の視察」について

青少年の健全育成の観点から、その野外活動の場として、この雪宝頂のＢＣ付近が適しているのではないかと考えました。そして、中学２年生の直樹隊員が、現地でいかに活動し、いかに感じるかを探ることも、本隊の大きな目的の１つでした。

結論として、「ＢＣ付近は疑問」です。

８月４日、麻病村へ４時間余り、５日は4,170ｍのＢＣへ、これも４時間余り、直樹隊員は大人の隊員と同じペースで歩きました。特に、ＢＣ入りの日は、私の後にピタリと付いて、へばることなく元気に登りました。しかしこれは、日頃登山家である父親と日本の山をさんざ登っている彼にして可能なことで、一般の中学生の出来ることではありません。この時の大人の隊員の体調から考えても、複数の青少年を主体に構成された隊が、全員元気でＢＣまで登るとは期待できません。

また、ＢＣに登ってからが大変だと考えます。登山隊には、その上の「山に登る」という目的がありますが、青少年にこのＢＣ付近でどんな活動をさせたら良いのでしょうか。

それらを考慮すると、ＢＣ付近よりは、松潘や、山の中としては大溝辺りまでを中心にすれば良いだろうと考えます。例えば、大溝にＢＣを置くと、テント生活（自炊）、現地の人たちとの交流（子どももかなり居る）、川遊び、釣、雪宝頂・小雪宝頂ＢＣの往復等々の活動が可能です。

いずれにしろ、今回、直樹隊員はＢＣに２泊しただけで下山してしまったため、彼の行動を通して考えることができなかったのが残念でした。

今回の登山を通して、雨期である８月とは言え、３週間あれば雪宝頂登山は可能であることがわかりました。そして、比較的登山経験の少ない若い人、昔はけっこう登ったんだけれどもという中高年の人、そして、海外登山は初めてで自分にも登れるのかと不安を抱いている人、等々でも、このようにすればより多くの人が雪宝頂の頂上を踏めるだろうという結論を得ることができました。

当ヒマラヤ協会では、来年以後もこの山域に登山隊を送りたいと企画しています。今回得たノウハウを来年以後の隊に生かしたいと考えています。

今回、有形無形の形で多くの方々に御支援をいただきました。この書面をもって厚く御礼申し上げます。ありがとうございます。

雪宝頂秘話

秘書長　山　森　欣　一

1983年6月私と稲田専務理事（当時）は北京にいた。その春チベットのナムチャ・バルワ峰初登頂を目指しながら目的を果せず再挑戦を決めていた中国隊から、攻略の最大の障害は、「ナイプン峰のコルと頂上間に走る一条の岩壁だ！」と聞かされた。

世界に残された未踏峰としては、高度と品格からして最高の山であるナムチャ・バルワを中国隊が初登頂するのは当然と考えていた私達は、この壁の突破だけの協力員として、山田昇と片岡邦夫を派遣することを申し入れた。

中国側は、この地が外国人に未開放であることを理由にこの申し入れを断った。しかし、上で使う軽量化された装備類が不足しているとのことなので、天幕、スノーバー、ＥＰＩコンロ＆ボンベ、固定ロープ類を提供し初登頂にエールを送った。

さらに中国側からは、翌84年に再戦する隊員がこの秋に四川省で合宿を行うので、岩登りの技術指導をして欲しい！との要望があった。このため角田不二と吉田憲司両名を派遣した。

実はこの時の合宿の舞台が「雪宝頂」であった。私達は、ナムチャ・バルワ峰の上部に存在する一条の岩壁を突破するためには、「雪宝頂での実践的な岩登り訓練が有効である」と中国側幹部を説いたが、彼等は、本当に初歩的な岩登り技術の習得に固執した。このため、訓練は雪宝頂のふもと「松潘」にある岩場でおこなわれたのであった。

チベットの西にある「ナムナニ（グルラマンダータ）」と東にある「ナムチャ・バルワ」を軸に、大河「ヤル・ツアンポー江」を舞台にしたアドヴェンチャーを夢見ていた私達は、中国隊が初登頂した後の外国隊としてのナムチャ・バルワ峰登山の第一番目の許可を希望していたのであるが、その目の前に突然「雪宝頂」が出現したのであった。

秋の岩登り訓練から帰国した角田からの報告は興味の対象はスークーニャンの岩壁ルートであり、雪宝頂は話題にならなかったのである。

1985年北京からチベット、四川を訪問した私と稲田は成都で一枚の写真を見せられた。青い空にピラミダルな真っ白な頂を持った山、それが「雪宝頂」であった。

開放政策が最も遅れていることを自認している四川省は、ＨＡＪの活動の柱である「未踏査」の地域をふんだんに残している貴重な地域であった。私達は、このようなことを踏まえて、雪宝頂を合同で登ることを提案したのであった。結果が大成功であったのは皆さん御存知のとおりである。

1986年秋、私は雲南省から四川省西部を回り、冬間近の雪宝頂を仰ぎ見た。凍てつくような厳しい空気が雪宝頂を包んでいた。そのとき何故かフト夏の雪宝頂に来て見たいなあ── と思った。

歳月は瞬く間に流れ、短期間でヒマラヤの山を楽しみたい！との声が多くなって来た。そのとき私はちゅうちょなくその舞台を「雪宝頂」に決めたのであった。

登山計画

趣　　旨

日本ヒマラヤ協会（ＨＡＪ）は、1967年にヒマラヤ愛好者を対象に創立されて以来、ユーラシア大陸の山野を舞台として活動し、登山・踏査だけでも70数隊を派遣し成果を上げて参りました。

ＨＡＪの野外活動は、未踏峰や未踏査地域を目指す隊、高峰の困難な課題を目指す隊、豊かな旅を追求する隊などに分けることが出来ます。

繁栄の一途をたどる日本の中にあって、経済的には多少ゆとりが出来たものの、長期間の休暇を取ることが難しい環境でもあります。また、一方では、登山界にも高齢化の波が押し寄せております。ＨＡＪの会員もこれら社会一般の波の中にある事は当然であります。このような会員の中から、「２週間程度の休暇の中で、ヒマラヤの高峰登山を楽しみたい／」との相談が寄せられる事が多くなりました。しかし、ヒマラヤの高峰が存在する場所の多くは、人里離れた遠隔地であります。

このような中から、山姿・アプローチ・自然環境・情報・経費等の面を考慮して選ばれたのが、中華人民共和国・四川省北部にそびえ立つ岷山山脈の最高峰「雪宝頂」であります。雪宝頂は、1986年に日本ヒマラヤ協会と四川省登山協会の合同登山隊によって初めて登られた山であります。そのピラミダルな山姿は正しく岷山山脈の主峰と呼ぶのに相応しく松潘高原にそそり立ち、地元のチベット民族が古くから聖山として崇めている信仰の山でもあります。

ＨＡＪがこれまでに培って参りました経験と、隊員相互の経験を元に安全登山を心掛け、山岳の自然を汚染しないことを大原則とし、この登山を通して些かなりとも日中両国の友好親善の役割を果す所存でありますので、この趣旨をご理解いただきまして、皆様のご支援・御協力を賜りたくお願い申し上げます。

1991年５月

日本ヒマラヤ協会
1991年雪宝頂登山隊
隊長　酒井　国光

目標の山・登山の目的

1.目標の山

雪宝頂（Xuebao Ding　5,588m）
— 中華人民共和国四川省アパ・チベット族自治州松潘県 —

2.登山期間

1991年８月１日〜21日（21日間）

3.遠征の目的

1）雪宝頂の登頂
2）テイクイン・テイクアウトの徹底（山岳の自然を汚染しない運動）
3）青少年の野外活動の視察

隊の名称・構成

1.隊の名称

日本ヒマラヤ協会雪宝頂登山隊1991年
（英文名）HAJ　Mt. Xuebao Ding Expedition　1991
（略　称）ＨＸＥ−91

2.主催

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN（HAJ）

3.推進の組織

日本ヒマラヤ協会雪宝頂登山隊実行委員会
会　　長　稲田定重（ＨＡＪ理事長）
実行委員長　山森欣一（同 専務理事・登山隊秘書長）
副実行委員長　酒井国光（同 監事・登山隊隊長）
事務局長　尾形好雄（同 常務理事）

委　　員　八木原圀明、土居正勝
　　鈴木雄一、登山隊隊員

登山隊事務局
〒169 東京都新宿区高田馬場 3−23−1
　　淀橋食糧ビル 506号
☎ 03-3367-8521　FAX 03-3367-4509

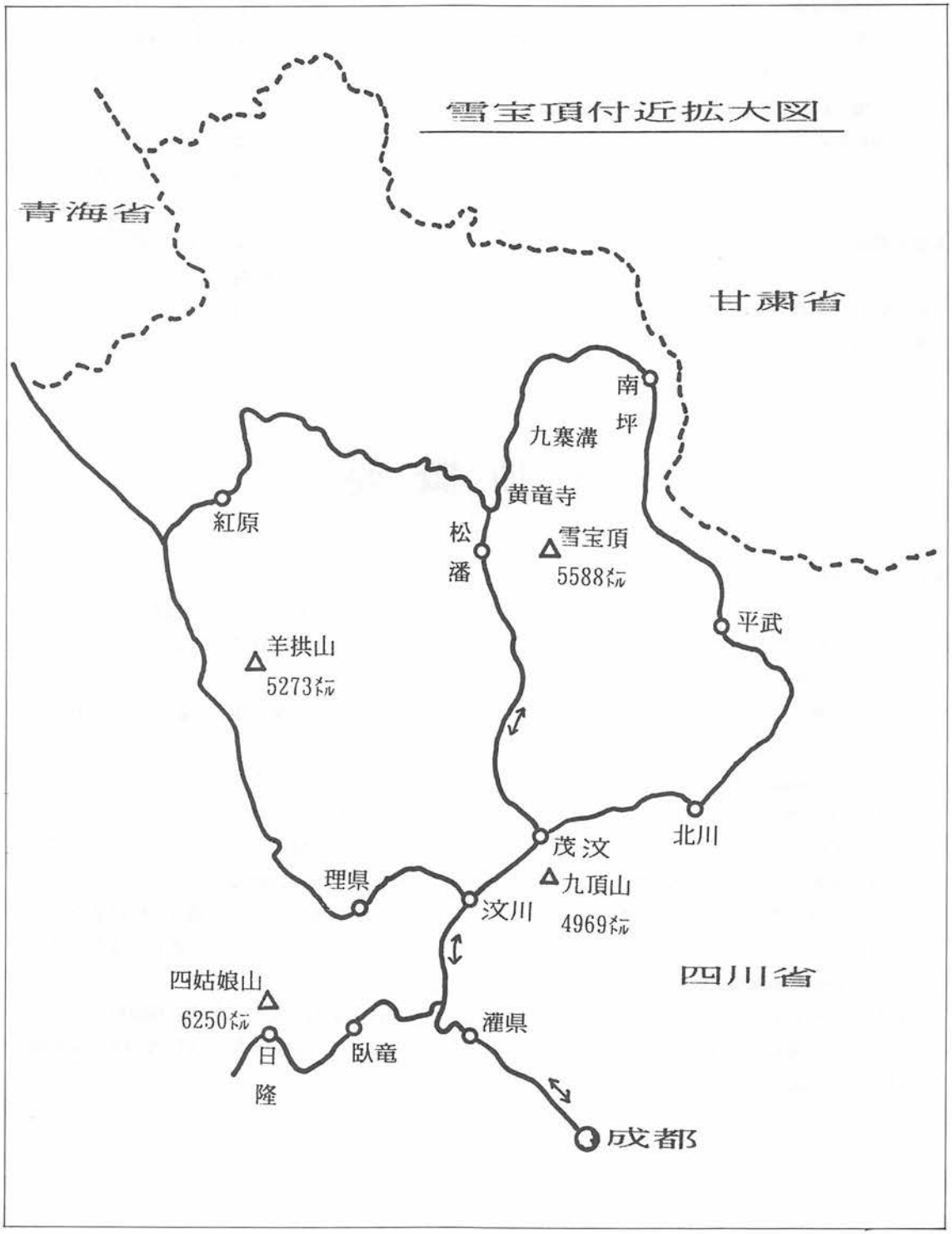
現地連絡先
中華人民共和国四川省成都市体育場路1号
　四川省登山協会気付け

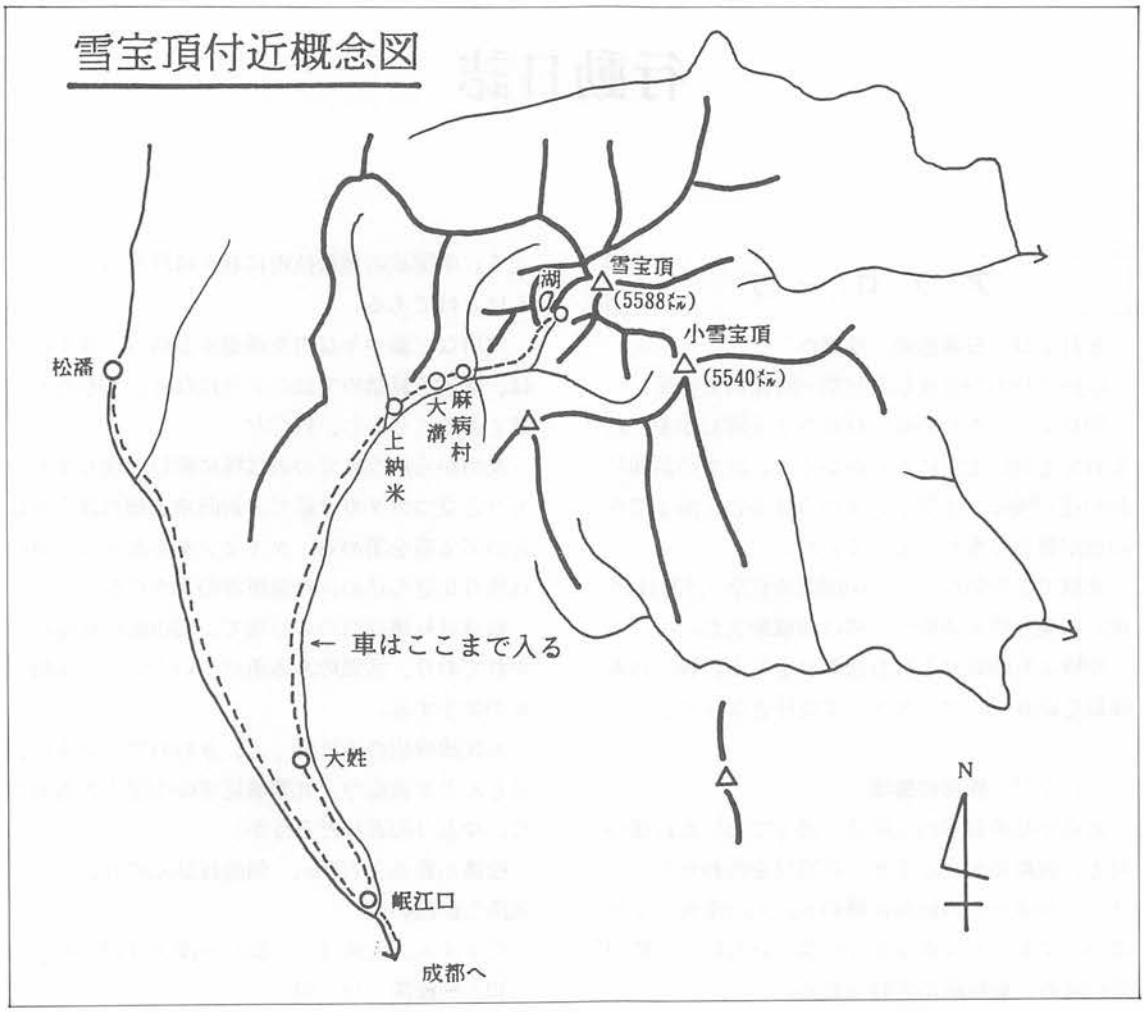
4.隊の構成

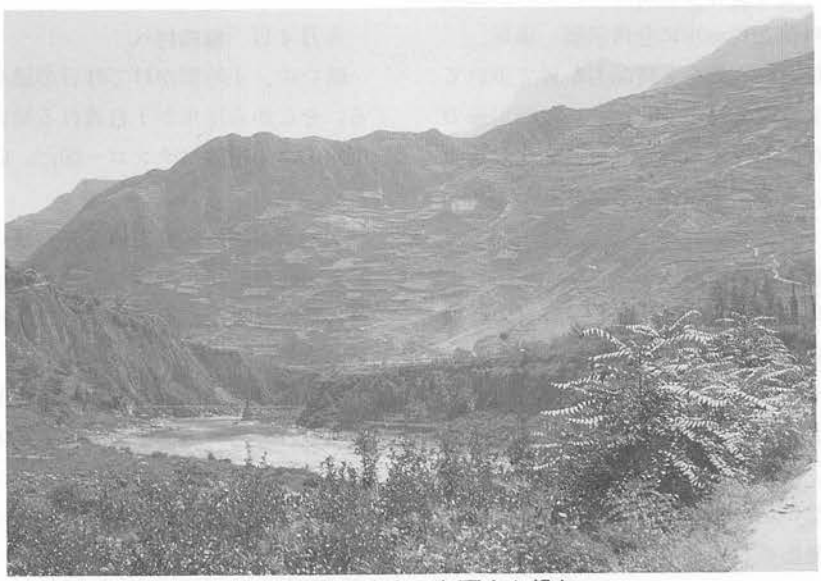
隊　　長　酒井　国光（52才）茨　城
秘 書 長　山森　欣一（47才）東　京
隊　　員　江尻　健二（58才）東　京
隊　　員　平川　宏子（51才）大　阪
〃　　三輪　　力（48才）兵　庫
〃　　森山　安次（41才）東　京
〃　　戸部　秀男（40才）東　京
〃　　久保　　均（37才）青　森
〃　　柏倉　秀克（35才）愛　知
〃　　小野田　靖（34才）東　京
〃　　中居　満穂（29才）東　京
〃　　合田　祐介（23才）北海道
〃　　山森　直樹（13才）東　京
連 絡 官　童　　明純
副連絡官　鐘　　貴成
通　　訳　郭　　訓良

行動概要

8月1日　全員成田出発。北京で中国西南航空に乗り換え成都へ
2日　隊荷整理、午後、文殊院見学
3日　成都発6時〜松潘着18時
4日　松潘発7時〜大姓を経て麻病村へ。テント泊（3,200m）
5日　BC建設（4,170m）
6日　登山活動開始。ルンゼ入口までルート工作。高所順応
7日　休養日。江尻隊員体調悪く松潘へ下山。山森秘書長父子、童連絡官同行。
8日　南稜主稜線（4,900m）までルート工作。
9日　雨のため停滞
10日　ルート工作隊、荷上げ隊に別れて行動。全員稜線まで登る。
11日　第1次アタック隊（森山、平川、戸部、久保、柏倉）C1（5,100m）へ。三輪隊員体調悪く松潘へ下山。
12日　第1次隊登頂。第2次隊（酒井、中居、合田）C1へ。
13日　第2次隊登頂。全員BCへ下山。
14日　下山準備
15日　松潘へ下山
16日　松潘〜成都
17日　隊荷整理
18日　宝光寺、桂湖見学
19日　竹細工店、蜀刺繍店、杜甫草堂、武侯祠見学。夜は四川省登山協会主催の夕食会。
20日　成都〜北京、万里の長城見学
21日　14：50北京発（JAL-784便）成田着


雪宝頂付近拡大図
青海省
甘粛省
南坪
九寨溝
黄竜寺
紅原
松潘
雪宝頂
5588メートル
平武
羊拱山
5273メートル
北川
茂汶
九頂山
4969メートル
理県
汶川
四川省
四姑娘山
6250メートル
日隆
臥竜
灌県
成都





▲松潘への途中、九頂山を望む

行動日誌

アプローチ

8月1日　**日本出発、成都へ**

成田で13名が合流し全日空905便にて出発。

朝が早かったためか、昼寝をする隊員が多い。それでも長江上空にさしかかると、洪水の話題に話の花が咲く。上空1万mから見ると、海まで水の色が黄色く変わっているのだ。

北京で5時間待って、中国西南航空（SZ 4118便）に乗り換え成都へ。宿は西蔵飯店だ。

23時より連絡官と打ち合わせをする。後、日本隊員を紹介し、ウイスキーで乾杯となった。

8月2日　**隊荷の整理**

あらかじめ日本から別便で送っておいた11個の荷と、成都にデポしてあった器材を合わせて、プラパールボックス18個に纏める。入山準備、それはいつでも心がうきうきして楽しいものだ。精力的に進め、昼飯前に終わらせる。

昼は、かの有名な陳麻婆豆腐店へ行く。20皿以上もの豪勢な料理とビールに全員満腹。満足。

宿まで20分位というのを2時間もかけて歩いて帰る。途中、文殊院を見学する。ここは四川省の仏教の中心地だ。市内の仏教寺院は、文化大革命の時破壊され、現存するのはここだけとか。

8月3日　**成都から松潘へ**

成都の朝6時はまだ暗い。しかし、今日の行程を考えると早立ちしかない。

TOYOTA ランドクルーザー4台に隊員13名、連絡官2名、通訳1名、他に中国人カメラマン2名が分乗する。（このカメラマンはどこから派遣されたか知らないが、往復我々と行動を共にし、雪宝頂周辺の撮影をしていた。）また、隊荷はトラック1台に纏める。

車は岷江沿いの道をものすごいスピードで突っ走る。中国流の運転技術に我々は肝をつぶすことしばしばである。

汶川など賑やかな町を通過する時は、我々の目は、露店を見詰めて皿のようになる。もちろん松茸である。しかし、残念!!

汶川から茂汶までの道は特に悪い。埃りがもうもうと立つガタガタ道だ。対向車と擦れ違う時はあわてて窓を閉める。タイミングを逸すると車内は埃りが立ち込め、喘息患者のようになる。

松潘は松潘高原の中心地で、旧市街は城壁に囲まれており、活気のある所だ。いろいろな少数民族が共生する。

人民政府招待所に着くと、きわめて人が多い。ほとんどが黄竜寺、九塞溝見学の中国人の若者達だ。ゆとりの表れだろうか。

松潘の標高2,750m、朝晩はひんやりと冷たく気持ちが良い。

＜タイム＞出発（7：30）～茂汶（12：30～13：30）～松潘（18：00）

8月4日　**麻病村へ**

暗い中、1時間かけて昨日の道を岷江口まで戻る。そこからは車が1台通れる幅の道だ。山間で、川原の小平担地はチンコー畑だ。収穫も間近かだろう。

ゲートのある大姓を過ぎ、しばらく走った1軒家で一休み。誰かを捜しているようだったが、帰路に気がつくが、そこは我々のガイドの家であったのだ。

何と、草原にはゴミ焼却跡が。明瞭に日本語が読み取れる。テイクイン・テイクアウトを実践しようとする我々は、他パーティのゴミでも拾って処理する。また、中国側の先生達にもこの精神を説いたが……。

思わぬ所で4時間も歩くことになった。ほんの20～30mだが崩壊のため道巾が狭く、ランクルで

は通れないということになったからだ。荷は馬を呼んで運ぶことになり、隊員は私物だけで先行する。お花畑の中の良い道だ。

川が大きく右に曲がり二股となった所より、右の谷沿いに入る。すぐ上の上納米の部落より雨となる。山はまだ見えない。

麻病村の書記さん（勿論共産党の）の家に入り、お茶などをご馳走になりながら、荷物を待つ。この部落の家は、山の中にしてはどこも立派な造りだ。

15時過ぎ、近くの川原にテントを張る。例によってギャラリーが多い。標高3,200m。

＜タイム＞出発（7：00）～岷江口（8：00～06）～大姓（8：30）～歩き始め（10：15）～麻病村（14：10）

8月5日　**ベースキャンプ建設**

ＢＣ入りを控えた我々は、早くから起きて出発準備をした。しかし、馬工たちはゆっくりだ。9時になっても朝食中とか。しかたなく隊荷を任せて出発する。

川沿いに進み、15分で右岸の尾根に取り付く。森林の中を川に沿って斜上するように道が付けられている。先頭の童連絡官と通訳のペースと我々のペースが合わず、初めはやたら休みが多かったが、登るにしたがい結局は我々のペースに落ち着く。つまり「slowly and steady」である。

廃寺（扎糞寺）より先は九十九折の急登である。4,000mに達した辺りからブルーポピー登場。それも踏み付ける程に多い。

段丘状を乗り越えて、平らになった川が右に曲がるとＢＣ予定地だ。広い草原の中央を川が流れ、周囲を山に囲まれた別天地だ。草原には高山植物が今を盛りと咲き乱れている。正面に目指す雪宝頂のピラミダルな山頂が聳えている。予定ルートの南稜、それに突き上げるルンゼも手に取るように明瞭に見渡せる。

実測の標高は4,050m位、しかし、先蹤者に倣って4,170mとする。

それにしても'86年ＨＡＪパーティの足の早いのには驚く。本隊は早朝松潘を出て大溝（麻病村の20分位下）から3時間程でその日のうちにＢＣに入っているのだ。我々は、麻病村に泊まってもＢＣまで4時間もかかったのだ。それもかなり真面目に歩いたのだ。

ＢＣ建設。日本側5張。中国側3張、馬工2張のテント村が出来上がった。

19時過ぎ、ＢＣ開き。日本酒とウイスキーで盛り上がる。高度順応していない体には利きが早い。途中から雨が強く降り出し、テントは浸水した。

＜タイム＞麻病村（9：30）～ＢＣ（13：45）

▲大溝へのアプローチ

◀ブルーポピー

登　山　活　動

8月6日　（曇り）　**登山活動開始**

＜ルート工作隊＞　森山、戸部、小野田、中居

＜ルート指示＞　酒井

＜ＢＣ整理後対岸の山へ＞　江尻、平川、三輪、柏倉、久保、合田

＜ＢＣ整理後付近の散策＞　山森、山森（直）

計画の当初から、ルートは'86ＨＡＪ隊の登った南稜ルートと決めていた。そして、入山して自分の目で見て、それが最良と感じた。

登山活動第１日目はルート工作だ。登攀隊長の森山以下４名がこれに当たり、酒井が途中からプリズムサポートする。

工作隊は川を１時間程詰め、右手のモレーンを登った。しかし、ガスがかかりルートを判明し難い。かなり時間をかけ、トラバース地点に着き、ここから50ｍロープ６本を固定する。特に後半、トラバース中は視界悪く、ガスの切れ目から酒井がプリズムで方向を見定め指示した。

他の６名は、食糧、装備等の整理をし、後、BCから川を渡った対岸上部にある湖を往復した。

＜タイム＞ルート工作隊出発（８：25）～最高到達点（15：30）～ＢＣ着（17：50）

8月7日（曇り時々雨）**休養、江尻隊員下山**

朝起きると、江尻隊員が調子が悪いと言う。平川、戸部の両隊員に一応の診断をしてもらう。その結果、高所でもあるのでしばらく酸素を吸い、落ち着いてから松潘へ降りてもらった方が良いとの結論になる。

また、天気の状態も思わしくなく、日本出発以来６日間休みなく行動してきたため隊員にも調子の悪い者が多いということで、停滞とする。

10時頃から準備をし、11：05江尻隊員馬にて下山。山森秘書長、童連絡官が同行する。このため直樹隊員も同行せざるを得なかった。

終日、降ったり止んだりの天候であった。

8月8日（曇り）**稜線までのルート工作**

＜ルート工作隊＞　森山、戸部、久保、柏倉

＜荷上げ隊＞　酒井、平川、三輪、小野田、中居、合田

今日は全員が行動のため、ＢＣでの連絡を通訳の郭さんに頼む。彼は真面目な中国の若者。指示通りきちんと自分の任務を果たしてくれた。

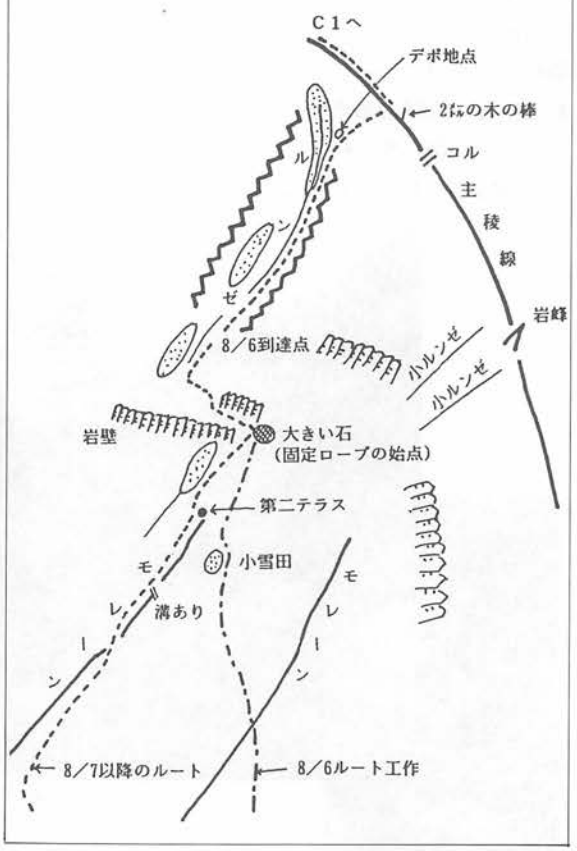
ルート工作隊は、６日の終了点からルンゼ右手の岩陰沿いに50ｍロープを６本固定し、南稜主稜線（4,900ｍ）に出る。

荷上げ隊は、１人調子の悪い隊員が居て、途中からＢＣへ下ったものの、稜線より１ピッチ下まで、テント他の荷上げをする。

終日ガスがかかり、霧雨の中を行動した。特にルンゼの中は落石が多く、先行パーティからの落石が唸りを上げて頭上を落ちてくるという恐ろしさを味わった。幸せなことに、今回は誰一人落石に当たらなかった。

それにしても、今日は全員疲れ切った１日だった。まだ、我々は完全には高度順応していないのだ。ＢＣ帰着後、各隊自由とする。つまり、食事

主稜線までのルート図



▼ＢＣでの憩い（焼肉パーティ）

も各自思いに任せた。結果的に、これが効を奏したと思われる。

それにしても、疲れているはずの隊員が21時過ぎ、思い思いにメステントに集まり、

「何としても、明日、ルート工作、荷上げをして以後の行動に備えたい。」

と言うのだ。隊長すっかり感激する。

しかし、夜半からまたしても雨が強く降り、朝まで降り続いた。

＜タイム＞

◦ルート工作隊（７：09）～稜線（15時）

◦荷上げ隊（７：50）～デポ地（16：00）～

両隊ともＢＣ着（19：25）

８月９日（終日雨）**停滞**

昨晩からの雨が朝になっても降り続く。上部では雪だ。

10時頃より、昨日ガイドが撃った山羊の肉をバラして、焼肉、スキヤキパーティの準備をする。久保隊員が手を真っ赤にして奮闘する。

どうせ飲むなら早くからと（誰言うとなく）飲み始め、またまた盛り上ってしまった。特に、江尻隊員を松潘まで送って戻ってきた馬工の馬さんが加わってからは盛大であった。（隊員によっては、意識朦朧として次の日目覚めた者数人）

８月10日（晴のち曇り、時々雨）**ルート工作**

＜ルート工作隊＞　森山、戸部、久保、柏倉

＜荷上げ隊＞　酒井、平川、小野田、中居、合田

＜ＢＣ停滞＞　三輪

昨日の降雪で、4,600ｍ位から上は真っ白になった。ルートである上部のルンゼには、黒い筋が１条入っている。雪崩の跡か。

荷上げ隊は、ルート工作隊の「だいじょうぶ」の判断を聞いてから行動することにする。

９：40やっと荷上げ隊が行動すると、中国人のカメラマンが１人ついてきて、さかんに我々の姿をカメラに収めていた。どうせモデルになるならもう少し調子の良い時にしてほしかったと思った隊員２～３人。

天気は不安定だ。霧雨が強くなったかと思うと、薄日が雪面を照らし、雪盲になるのではと心配したりを繰り返す。そんな中、もくもくと固定ロープを辿った。

17時、4,900ｍの稜線へ着くと、何とそこには反対側から登ったという現地の若者が２人居るではないか。水晶採りとか。普段着、穴のあいたような運動靴、荷物なし、Ｃ１地点付近で口笛を吹いていたとか。彼等に、

「我々は雪宝頂に登りに来ているので、このロープは14日まではこのままにしておいてほしい。若しロープが欲しいなら、14日以後は外して良い」

と説明する。その後、彼等は反対側（東面）の脆い壁の中へ飛び降りて行った。

考えるに、雪宝頂一帯は彼等現地人の生活の場なのだ。水晶を求めて、これらの山々、壁の襞１本１本を以前から縦横に歩き回っていたのだ。そう言えば、我々の行動中「ドカーン」という強い音が山々に木霊すことが何回もあった。懸垂氷河の崩壊か、落石かと肝を冷したが、あれは彼等が仕掛けた発破の音だったのだ。

夜、三輪さんの状態について検討する。どうもこのままＢＣに１人で残っていても良くなる気配がない。自分から天幕の外に出て何かをしようという気力が無いというのも１つの高度障害の症状なのだろう。空咳や顔の窶(やつ)れも気になる。

明日、松潘へ下山させるにはどうしたら良いかを、連絡官と検討を重ねる。結局、連絡官、通訳共、立場上ＢＣを離れられないので、馬工２人がついて、馬で下山する。途中、大姓から松潘の病院に電話を入れて救急車を要請するということになった。こうするのが１日で松潘へ降りられる最良の策である。（江尻隊員下山時の反省からか）

以後の登山活動についても最終の決定をする。

◦登山期間は13日までとする。
◦14日下山準備
◦15日松潘へ下山

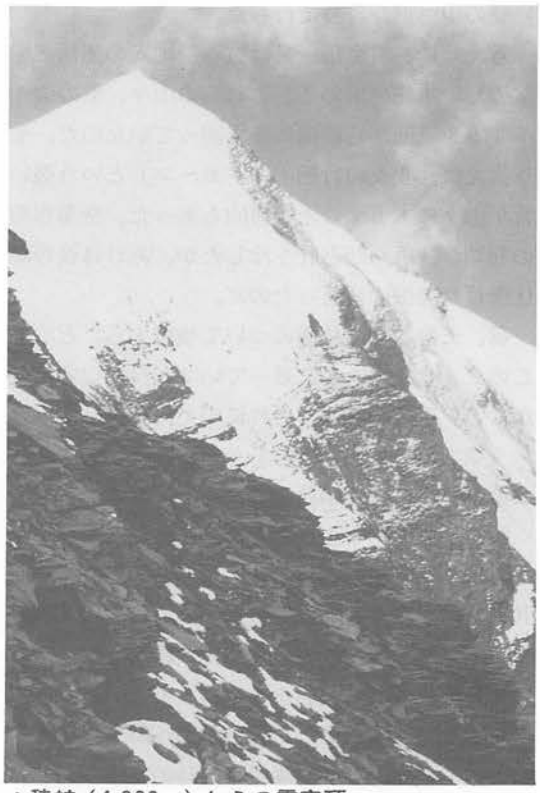
高所順応の不足なのか隊員の行動も今一つ精彩を欠き、疲れもひどい。しかし、明日、第１次アタック隊をＣ１に上げざるを得ない。

ルート工作隊と荷上げ隊のメンバーの入れ換えも考えたが、今までの到達高度を考え、第１次隊は今日のルート工作隊の４名、それに高所経験の多い平川隊員を加える。他の４名は第２次隊。さらに、１次隊の５名のうち、３名はその日のうちにＢＣに降ろし、森山、平川両隊員はアタック後Ｃ１泊まりとする。これは、第２次隊の補助と万一の時の医療のためである。

この線に沿って、全装備、食糧の配備を計画する。

＜タイム＞　ルート工作隊・出発（７：30）～稜線（14時）～ＢＣ（19：35）

荷上げ隊・出発（９：40）～トラバース始点（14：30）～稜線（16：45～17：20）～ＢＣ（19：35）


▲稜線（4,900m）からの雪宝頂

８月11日（晴れ～曇り）**第１次隊Ｃ１へ**

＜第１次アタック隊＞　森山、平川、戸部、久保、柏倉

＜第２次隊＞　ＢＣ停滞

＜松潘へ下山＞　三輪

今までで一番とも言える良い天気だ。ガイドの話では、雲が東へ行くので山は良い天気で、これは明後日位まで続くと言う。今までの様子からどうも信じ難いのだが、この際は、彼の言葉に期待するしかない。

第１次アタック隊が元気に出発した後、三輪隊員の荷作りをし、９時20分、馬で下山して行った。また１人減り寂しくなる。彼等の分まで残された９人で頑張るぞという決意を新たにする。

第１次隊は、14時に4,900ｍの稜線に出たが、Ｃ１手前の岩場に手古摺り、Ｃ１入りは18時頃になってしまった。前日のルート工作の甘さの付けが回ってきたのだ。

この頃のＣ１付近の天気は霧雨だった。

＜タイム＞出発（７：45）～稜線（14時）～Ｃ１（18時）

８月12日（霧雨）**第１次隊登頂**

寒い夜が明けた。ＢＣは風強く、ガスがかかり視界２～300ｍ。Ｃ１では風は弱いとか。

８時にはアタックに出発すると言う交信を聞いてから、第２次隊も出発する。

快調にモレーンを登り、９時の交信をする。しかし通じない。たぶん頂上直下だろうから頂上で交信するつもりだろう。ＢＣ（郭通訳）に以後、無線をオープンにしておくよう指示し、我々もオープンにしたまま行動する。

登るにしたがい、今日も霧雨だ。

今か今かと思いながらモレーンを登る。しかし、10時になっても何の音沙汰も無い……。

’86年ＨＡＪは第１次、第２次隊ともＣ１から頂上まで１時間半足らずであった。今回も当然その位で登れるだろう。天気が悪いので多少余分にかかったとして…。出発が８時半頃になったことも考えられる。霧雨の中もくもくと登りながら、有り得る場合にいろいろと考えを巡らす。

11時、無線機はジィジィと同じ音を発し続ける

だけ。
「何かあったな…」
「何があったんだ…」
気持ちがだんだん暗くなり、時間がたつにつれ悪い事態へ悪い事態へと考えが落ち込んでしまう。
12時、トラバース開始点の固定ロープにユマールを懸けた時に、待ちに待った
「こちら森山です。ただ今頂上に居ます」
の朗報が飛び込んできた。
すんでの所で
「4時間も何をしてたんだ」
と、怒鳴り付けるところだったが、ぐっと堪え、
「オメデトウー！」
とにかく無事5名が頂上に立ったという安堵感が心を支配する。また、同時に、
「我々2次隊も必ず登るぞ」
との気持ちを強くする。
ルンゼの固定ロープを登る頃、遅れていた隊員が、さらに遅れだす。ルンゼは落石が多い。なるべく離れないようにと思いつつ、さんざ待って（と思う程待って）やっと登ってくる姿に安心し、またユマーリングを続ける。
4,900ｍの稜線着14時30分。視界は20ｍ位だ。ここから2次隊の4名には未知の所だ。
右手が急傾斜で、砕石を積んだような稜線をしばらく登ると、さっき頂上に立った久保、柏倉の両隊員が降りてくる。
「おめでとう」
「ご苦労様」
「ありがとうございました」…
遅れ気味の小野田隊員に、
「これから先の稜線は悪いから、よほどシャキシャキ歩かないと無理だよ」
と言う。しかし、ここまで登って来たのだから、
「とにかく行ける所まで行く」
と登りだす
悪場の核心部に入る所で、固定ロープの整備をしてきた戸部隊員と会う。さかんに
「悪い。悪い」
を連発する。……
合田、酒井、中居の順に悪いと言われる稜線の核心部に入る。無理だと言われた小野田は荷物を

▼C1（5,100m）

置いて（戸部と共に）核心部を見に来たが、自分の目でそれを見てリタイヤーを決める。
核心部は岩が極端に脆く、小さな登り降りを繰り返すのだ。今はガスで下部は見えないが、痩せた稜線の左右は700ｍも切れ落ちているとのこと。
10ｍ程の岩場を懸垂下降で降り、脆い岩の稜線を100ｍ程進むとＣ１に着いた。
雪稜の手前に張った2張りのテントは、下がゴツゴツの岩の狭い岩稜の上だった。'86年隊とほぼ同じ所だ。
森山、平川隊員に迎えられ、びしょ濡れの天幕に潜り込んだ。
第1次隊の3人と小野田隊員はＢＣに下り、中国側から盛大な祝福を受け、豪勢なご馳走になった。
第2次隊3人は、明日の登頂に夢を膨らませ、20時頃寝袋に入った。
＜タイム＞
◦第1次アタック隊出発（8：05）～頂上（11：55～12：45）～Ｃ1（14：15）～3人Ｃ1発（14：40）～ＢＣ着（17：30）
◦第2次隊出発（8：20）～稜線（14：20～50）～Ｃ1（16：15）

8月13日（曇り後雨）**第2次隊登頂**
天幕の下の岩が尖って体に食い込む。何分かおきに寝返りを打っているようだ。また、酸欠なのか頭が割れるように痛い。ほとんど寝ていないような感じだが、それでも9時間余りも寝られた。
起きると外はガスがかかり、視界は悪い。アタック前、それはいつも時間をかけ、腹を満たす。次の食事の保障はないのだ。
雪面に出ると、雪は締まり歩きやすい。また、

昨日のトレールもしっかりしている。視界の悪い中、快調に登る。

30分も登ると上空のガスが切れ、鋭角三角形の頂上が現れた。

「近い」

「10分位で登れそうだ」

しかし、まだ固定ロープが出てこないので、距離はかなりあるはずだ。

「ゆっくり」「ゆっくり」……

左手からの尾根が近づき、傾斜が急になると固定ロープが出てくる。中居、酒井、合田の順にユマールを懸けて登る。……

6本ほど登ると傾斜が落ち、待望の頂上に着く。

「ヤッタゾー！」

大感激の若い2人の隊員に挟まれ、年寄り（実に2人の合計年齢と同じ年なのだ）の私も久し振りに興奮気味だ。

期待していた頂上からの展望は残念ながらだめであった。この写真を基に、この周辺の山域のより詳細な概念図の作成を、私的な目標の1つにしていたのだが…。

頂上の右手側はガスが巻き上げ、視界はない。左手側（西側）は、下方は雲海で見えないものの同高度は遠方まで見渡せ、いくつかの山並みが連なっている。上空は暗雲。

頂上での儀式をすませ、30分でC1着。まだ雪が締まり快適だった。途中、若い2人の登頂記念にとスノーバーを2本抜いて持たせる。

C1では、森川、平川2隊員により撤収が始まっていた。Take in・Take out の完全実践。とにかく全ての荷を降ろすことを指示する。ザックははち切れるばかりだ。その上、ロープを固定したカラビナは全て回収し、ロープも5本($\frac{5}{20}$)回収したので荷が重い。

戸部、久保の両隊員が荷下げのため登ってくる。

唯一残置した固定ロープは、例の中国現地人が来て、我々の行動を「ジーッ」と見ていたと思ったら、その後回収してくれた。

15時半BC帰着。中国側から盛大な祝福を受ける。シャッターの放列の波。

19時、日中合同の登頂祝賀会を開く。料理は中国側スタッフの心尽しの物だ。中国人カメラマンの（程海軍）（曽志武）の2人も加わる。とにかく彼等は芸人なのだ。酒の交換、乾杯の応酬、応酬、応酬…（と少し強調しよう）、日中歌の競演、競演…（と、ここでも強調）

とにかく盛大だった。残されたのは荷をまとめて下山するだけだ。

＜タイム＞第2次アタック隊出発（8：20）～頂上（9：37～10：15）～C1（10：45～11：35）～BC（15：30）

頂上を踏んで

戸部秀男

8月12日AM8：05冬山装備に身を固め、霧雨の中をC1を出発し頂上を目指す。濃い霧雨の為視界はきかないが、風は殆ど無くまずまずの天候だ。

稜線沿いに登って行けば頂上を踏めると読んでいたが、その稜線もボンヤリと右手に見える。森山氏、戸部、柏倉氏、久保氏、平川氏の順番で登って行く。途中、小さなクレバスが表れたので、トップの森山氏と二番目の私がアンザイレンし、コンティニュアスで進む。他は二人に追従する。傾斜が増して来た頃より安全を期し固定ロープをセットするも、打ち込んだスノーバーは軟雪の為殆どきいていない。3本目のロープをセットした頃よりトップの森山氏が極端に遅くなった。時間もかなり経過していたので、私とトップを交代した。天気は霧雨は上がっていたが、相変わらず霧が濃く頂上は見えない。森山氏とトップを代わった所より初登頂時の5年前の古い固定ロープが表れた。手持ちのロープが1本だけだったので、その古いロープを雪の中から手繰り寄せ登って行く。しかし、頂上1ピッチ40mが雪に埋もれて出てこないので、柏倉氏にビレーしてもらい、11時55分ついに三角形状の狭い頂上に到達した。何と3時間50分を要してしまった。二番手に柏倉氏、そして久保氏、森山氏、平川氏と続いて頂上を踏んだ。

山頂は相変わらず視界がきかず残念であったが、しかし、5年ぶりに私達によって頂上を踏まれ、また2度目なのだと思うと素直に嬉しい気持ちになった。一人一人とガッチリ握手を交わし、登頂

出来たことを祝し合った。帰路は固定ロープを張り直しながら下山したが、気温が上がり、雪がアイゼンにダンゴ状に着き歩き難かった。

登山を終えて

8月14日　**下山準備**

終日雨だった。昨晩のうま酒の余韻を十分に味わい、午後梱包。

夜はがらーんとしたテントで最後の晩餐をする。隊員の日焼けした顔、むくみはひどい。疲れからか、元気もなく、早々に寝る。

8月15日　**松潘へ下山**

登山隊の目標の2つ目は、Take in Take out. ゴミ類はガソリンをかけ、燃える限りは燃し、燃え残りは袋に入れて成都まで（松潘のつもりが車の関係で成都となった）下ろした。しかし、馬工たち現地の人たちの焚き火の跡はどうしようもなかった。今、問題となっている自然保護の立場からは、これを何とかしなければならなかったのだが……。

馬を先頭に下山開始。残念なことに山は我々を見送ってはくれない。

ガスに見え隠れする対岸の山、下る馬の列、登頂に心を膨らませた隊員達…シャッターは押し続けだった。

降ったり止んだりの中、麻病村を過ぎ15分も下ると、草原の中に我々の隊荷が降ろされていた。ここが大溝とか。

鐘連絡官が何か言いながら、馬に乗って下って行った。通訳もまだ下りて来なかったので何だかわからなかったが、後で考えると、

「今からトラックを呼びに行ってくるぞ。みんなは昼飯でも食って、ゆっくり待っていてくれ。」

と言ったのだ。（これ間違いなし!!）

とにかく、我々隊員は、延々と3時間も待たされ、やっとトラックター4台が来たのだ。

この間、隊員は思い思いに時を過ごす。昼寝、釣（ただし成果はゼロ）、村の子供と戯れる。隊員どうしの会話、中国人カメラマンとのカメラ談義、お花畑でエーデルワイスと囁き合う。馬さん（馬工）に山羊鍋をご馳走になる…。

トラックター（トラジーと言う）に荷を載せ、その上に人間がへばりつく。動きだしたトラジーは、正に尾骶骨割り、悪魔の乗り物だ。ちょっとした段差や岩石は何のその、バタバタとエンジン

▲帰路、トラジー脱輪

の音も高らかに疾走する。その度に荷台の我々は跳ね上げられ、落下し尾骶骨をガーンと強打するのだ。

上納米の部落から上流を振り返ると、この山群第2の高峰、小雪宝頂（5,540m）が見える。3つの山頂を持つ、台形状のがっちりとした山だ。中央の雪のピークが頂上だろうか。

「来年はあれに登ろうか」

新たな夢も膨らんだ。

この悪魔の乗物も1時間も乗ると慣れてくるのか、天使の乗物のような気分になってくるから不思議なものだ。途中、あわや川へ墜落の危機と、運ちゃんのストライキのハプニングがあった。後者の方は、鐘連絡官がそっと○○元を握らせてけりをつけた。金の世界に戻って来たことを実感する場面だった。

大姓では、先に下った山森秘書長以下に迎えられる。江尻、三輪両隊員の元気な顔がうれしい。

松潘泊まり。羊の丸焼きで盛大な祝賀会をする。

＜タイム＞出発（9：25）～麻病村（11：30～50）～大溝（13時～15：55）～大姓（18：35～19：00）～松潘（20：30）

8月16日　**成都へ**

雨のため各所で道路が寸断されているので黄竜寺の見学は止めて成都へ帰るということになった。

暗いうちに出発したが、予想通り何回かの通行止めに会う。

岷江の流れ、山間の悪路、人家のカワラ屋根等々に、三国志等で読む「蜀の桟道」「山市」のイメージを追いながらの一日であった。

最近、成都市街に入る車は、全て汚れをチェックされ、汚れている車はその場で洗車することを義務付けられているとか　1台4元。ここでも長く待たされた。

＜タイム＞出発（7：05）～茂汶（12：15～14：15）～成都（20：00）

8月17日　**隊荷整理**

暑い日であった。午後4時頃までかけて、汚れ物、濡れ物も完全に処理することができた。

錦江賓館に行き、登頂成功、成都帰着の一報をＨＡＪ事務所へファックスで入れる。

泊まりは四川省登山協会の事務所のある西蔵飯店（20日まで）。

8月18日　**観光**

1日早く成都に帰ったため、観光日が1日多くなった。宝光寺、桂湖見学。

宝光寺は成都より車で40分程の新都市にあり、五百羅漢や唐代の舎利塔などが有名である。観光客多く、門前市もにぎやかである。

夜、費用の清算の後、火鍋へ行く。しかし、今年目につくのは「健康火鍋」。あの口の中が焼けるような辛さはない。

8月19日　**市内観光**

午前中、雨の中を竹細工店、蜀刺繍店、杜甫草堂の見学。西蔵飯店にもどり休んだ後、午後は武侯祠（正式名は漢照烈廟）の見学をする。

夜は、四川省登山協会主催の夕食会である。趙先生、連絡官、通訳をかこんで大いに盛りあがった。

8月20日　**北京へ**

北京行の一番の飛行機に乗るべく、5時半出発。まだ暗いし、昨晩のアルコールも残っている体にはきつい早立ちだ。

北京空港からは直接万里の長城へ。車で2時間余りだ。長城は以前来た時に比べ観光地化したことおびただしい。人出も多い。特に気のつくのはどこでも中国人の観光客が多くなったということである。

長江の洪水被害のためか全国的に宴会は自粛とか、夕食会は中国側は3人だけで、静かに飲み、食うだけであった。

天壇飯店泊まり。

8月21日　**日本帰国**

費用の清算をすませ、あわただしく友誼商店にて買物をする。

14時50分北京発ＪＡＬ784便、成田着18時30分。

多くの出迎えを受け、無事帰国。空港ロビーにて登山隊は解散した。

第Ⅱ部

隊員紹介

随　　想

隊員紹介

①住所　③勤務先 ④所属団体 ⑤高峰登山歴

隊長　酒井国光　Sakai　Kunimitsu

1939年4月生（52才）

① 茨城県筑波郡

②

③ 聖徳大学附属小学校

④ 昭和山岳会

⑤ 1976　アメリカ、マッキンリー（6,194m）隊長

1979　ヨーロッパ、アルプス（数座）隊長

1980　ヨーロッパ、アルプス（数座）隊長

1983　パキスタン、ビルチャール・ドバニ（6,134m）登攀隊長

1984　中国、アムネマチンⅡ（6,268m）副隊長、登頂

1986　アメリカ、ドラム（3,662m）隊長、登頂

1988　パキスタン、ブロード・ピーク（8,047m）隊長、登頂

1989　中国、シャラリ（6,032m）隊長代行

アムネマチン、シャラリに続いて3度目の中国登山である。最近、頓にその魅力に引き付けられだした。今回は、日本にあっての日頃の不摂生と、山に入ってからの少食大飲のためか、初期には今一つ調子が出なかった。アタック前の2日間の禁酒、食べまくりで復調。アタック時は絶好調（？）の顔をして若い二人について行った。頂上ではつられて「少々興奮気味だったかな」と考えると赤面の至りだ。

秘書長　山森欣一　Yamamori　Kin-ichi

1944年2月生（47才）

① 東京都江戸川区

②

③ 日本ヒマラヤ協会

④ 山嶺登高会

⑤ 1975　インド、ヌン（7,135m）副隊長

1978　パキスタン、ハチンダール・キッシュ（7,163m）副隊長

1980　ネパール、カンチェンジュンガ偵察隊長

1981　ネパール、カンチェンジュンガ（8,586m）隊長

1982　インド、クン（7,077m）隊長

1984　中国、ナムナニ（7,694m）偵察隊長

1985　中国、ギャラ・ペリ（7,294m）偵察隊長

1986　中国、ゲニ（6,204m）偵察隊長

1987　中国、ラプチェ・カン（7,367m）隊長

1989　中国、シャラリ（6,032m）隊長

言わずと知れたヒマラヤ協会の専務理事。「中国登山通の第一人者である」と日頃感じ入っている。過去10回を越す海外登山は「長」という文字の付くものばかりであり、常々、隊を登頂へと導いてきたが、自分自身には登頂がなかった。今回は密に狙っており、私も共に頂きへと期待していたが、万やむを得ず松潘へ下山せざるを得なかった。

隊員　江尻健二　Ejiri Kenji
1933年５月生（58才）
①　東京都小平市
②
③　日中学院
⑤　1987　中国、ゲニ（6,204m）

隊の最年長者と言っても、まだそんなに「年」ではない。その上、山の頂上に年齢制限はない。「必ず登頂」と、富士山へも何度か通い、現地でも山に入るまで、若い隊員に交じって頑張り通した。しかし、ＢＣで体調を崩し、隊長命令で山を下らざるを得なかった。さぞ残念な事だったろう。帰国後も山を続け、次回に備えている様子なので、期待している現在である。

隊員　平川宏子　Hirakawa Hiroko
1940年２月生（51才）
①　大阪府寝屋川市
②
④　大阪わらじの会
⑤　1970　ネパール、アンナプルナⅢ(7,555m)登頂
1980　ケニヤ、キリマンジャロ（5,685m）登頂
1986　アルゼンチン、アコンカグア(6,959m)登頂
1990　インド、サトパント（7,075m）登頂

紅一点、隊の女房役、いやお母さん役。12人も男隊員が居ると、とかく小さなことで角が立ち易いが、彼女の存在が隊を和ませた。これも長年の職業からきた人柄のなせる業か。「また一緒に海外の山へ行きたい」というファンが数名生まれた。海外登山の経験も豊富で、隊長としても、第一次アタック隊を決めるに当たり、何の不安もなく選ぶことが出来た。また、登頂後、Ｃ１に残り第二次隊の世話をしてくれた。

隊員　三輪　力　Miwa Tsutomu
1942年８月生（48才）
①　兵庫県神戸市
②
③　梅花高等学校
④　好山好会
⑤　1973　メキシコ、ポポカテペトル(5,452m)登頂
1983　トルコ、アララット（5,165m）登頂

今までは小さなパーティで海外の山旅を楽しんでいた様子。今回は、13名もの隊の庶務係としていろいろ考えもあったらしいが、山に入ってからは今一つ調子が出ず、隊長命令で松潘へ下らざるを得なかった。クリスチャン系の女子高校で、社会科の教鞭をとる職業柄か、たいへん真面目な性格の人で、理想と現実の間で悩んでいたようであった。

隊員　森山安次　Moriyama Yasuji
1949年12月生（41才）
①　東京都杉並区
②
③　ロイタージャパン(株)
④　同人パイネニアソブ
⑤　1985　中国、クラウン（7,295m）
1987　中国、ラプチェ・カン（7,367m）

中国登山は3度目。ラプチェ・カンでは、6,900mのファイナルキャンプに入りながら登頂を諦めるなど、未だ登頂の経験がなかった。山は低いながら、「今回こそは」の決意をもっての参加であったろう。登攀隊長として常に隊のトップ集団を率いて活躍した。ジャイアント・パンダのニックネーム通り、一献入ると、身振り手振りで剽きん振りを発揮する、憎めない好漢である。

隊員　戸部秀男　Tobe Hideo
1950年9月生（40才）
①　東京都調布市
②
③　戸部接骨院
④　四季山岳会
⑤　無

初めての海外登山にしては絶好調であった。終始、隊の先頭でルート工作をし、登頂へと導いた。これも職業柄基礎体力に恵まれているからなのか。責任感が強く、アタック後の下降時、荒天の稜線で我々二次隊のために、一人フィックスロープの安全点検をしてくれていた姿が目に焼き付いている。日頃は、子供の学校のＰＴＡ会長として活躍の由、正に「当を得ている」と教師である私には頷ける。

隊員　久保　均　Kubo Hitoshi
1954年6月生（37才）
①　青森県三沢市
②
③　(株)山下商店
④　南部山岳会
⑤　無

髭もじゃの熊さんのような風貌に似合わず、内に秘めた優しさ。「気は優しくて力持ち」という言葉を地でいく男である。山では、ルート工作から第一次アタックと隊の先頭部で活動してくれた。また、第二次隊の登頂後、前日の下降で膝を痛めたのを押して、荷下げに登ってきてくれた。ＢＣで手を真っ赤にして山羊をバラしていた姿が目に浮かぶ。平川隊員ファン会会長（？）である。

隊員　柏倉秀克　Kashiwakura Hidekatsu
1956年３月生（35才）
① 愛知県名古屋市
②
③ 愛知県立名古屋盲学校
⑤ 1989　ヨーロッパアルプス、ブライトホルン
他登頂

５月の富士山合宿では、「年来の友人をつれて行っていいか」ということであったが、来てみると友人とは奥さんのことであった。それまでは２人で睦まじく海外の山を楽しんでいたが、今回は一人寂しく（?）参加した。隊のカメラマンとして活躍し、第一次隊として登頂した。会報『ヒマラヤ 240号』やこの報告書の写真の多くは彼の力作である。

隊員　小野田靖　Onoda Yasushi
1957年４月生（34才）
① 東京都東久留米市
②
③ 運輸省東京航空局
④ 東京緑山岳会
⑤ 無

13番目の隊員として参加を決定したのは、５月末であったが、話好きで、すぐに隊員ともなじんだ。山にあっては、途中首を痛めたが、もくもくと荷上げをしたのは「立派」の一語。さらに、第二次アタック隊として、痛い首をかばい、一歩一歩（牛歩のごとくではあったが）高みへと迫っていく姿勢には感動すら覚えた。「何とか彼を登頂させられなかったのか」と隊長として心が痛むこの頃である。

隊員　中居満穂　Nakai Mitsunori
1962年１月生（29才）
① 青森県八戸市
②
③ 在中国
④ 南部山岳会
⑤ 無

記録係として、隊の行動を詳細に残してくれたため、報告書など何かにつけ、活用できるのがうれしい。山では、常に荷上げ隊の中心として頑張った。自分が参っている時でも、他隊員がバテルと、その荷を自分の荷の上に積み上げる姿に好感が持てた。隊長にとって「苦しい時使える男」として、第二次隊に残したのが、８名登頂の一つの誘因であると確信する。現在、青年海外協力隊員として天津で活躍中。

隊員　合田祐介　Goda Yūsuke

1968年５月 生（23才）

① 茨城県新治郡

②

③ 北海道大学文学部学生（当時）

④ 北海道大学ＷＶ部

⑤ 無

北大の学生で、札幌からの参加。東京での合宿に、自転車で参加したのが初めの強烈な印象である（もっとも、新潟まではフェリーとか）。若者らしく、何にでも興味・関心を示し、探求心旺盛であった。おじさん達隊員にもて、「彼なら何でも許してしまう」とのこと。これも人徳。山にあっては、当初高所順応に苦しんだが、頂上アタック時には絶好調であった。Ｃ１の夜の若い２人の夢の語らいが忘れられない。

隊員　山森直樹　Yamamori Naoki

1977年11月 生（13才）

① 東京都江戸川区

②

③ 江戸川区立南葛西第二中学校生徒

隊の第３の目的のための参加であった。彼の行動や感じ方を基に、それを考察したいと考えていたが、残念であった。山にあっては、ＢＣへ入る日、大人の隊員にごして元気に登る姿が印象的であった。「この分では稜線まで。あわよくば…」と、楽しみにしていたのである。しかし、今回の経験は大きく花開いた。帰国後の校内マラソン大会で、一桁入賞。「やったね、直樹！」

〔この部分のコメントは、山での様子を主に、全て酒井が書かせてもらった〕

連絡官　董明純

副連絡官　鐘貴成

通訳　郭訓良

目的かなわず

酒　井　国　光

今回で９回目の海外登山になる。それらは、隊長とか副隊長とかいう役の付くものがほとんどであった。その役目を考えると、もっと隊のコントロールタワー的な立場に立たなければならなかったのか、それは分からない。しかし、多大の暇と金を使って行く海外登山、初めから隊長は頂上に登らなくて良いなどと考えて行ったことはない。そして、隊として登頂を果した時には、私も頂上に立つことが出来た。隊員に恵まれたと言うか、幸せなことである。

今回も、いつものごとく、登頂者の最後（つまり８番目）に頂上に立つことが出来た。

＊

「早く登りたい」「先に登りたい」……
後ろから若い合田隊員の呟きが聞こえる。先程から頂上は手に取るように近いのだ。
「待て」「焦るな」……
逸る気持ちを抑えて登り続ける。

目前のスノーバーの先で傾斜がぐっと落ちる。次のが最後の固定ロープだろう。
「合田、先に出ろ」
と促す。

全員ユマールを掛け替えると、

▲帰路、大姓にて

「ウワー」
と、駆けるように、３人は頂上になだれ込んだ。

1991年８月13日、午前９時37分、第二次アタック隊の３人は雪宝頂（5,588m）の頂きに立った。三角形状で東西に長い頂上だ。雪庇状の先から北面をこわごわ覗き込むと、そこには雪庇はなく、東下がりのナイフリッジだった。我々はその西よりの頂上に立った。登山期間８日間の最終日だった。

＊

登山の目的は、人それぞれにいろいろあって当然である。海外の山でもこれは同じだが、「登頂」の２字は、国内の山の場合より大きなウエイトを占めている。それにプラスして、一人ひとりが自分の密な目的を持っているのであろう。

私の場合は、最近、未知の山域（と言っても登山という見地からのものだが）のより詳細な概念図を作成すると言うことに、魅力を感じている。

前々から私感としての概念図を描いてはいたが、より客観的な概念図は、十年程前、「黒部の衆」なる面々と『黒部別山』をまとめた時に発する。高野晶三さん、近藤未知男さんの姿勢が大変参考になった。「よし、自分も。」と発奮し、海外の山としては、アムネマチン、シャラリ、ナムチャ・バルワなどを描いてきた。

１枚のスライドに実に多くの情報が盛り込まれているのだ。出来たら、頂上からの展望写真を基に作りたいのだ。しかし、今回も頂上からは十分な展望は得られなかった。思い返せば、何回か頂上に立ったものの、そのほとんどはガスに包まれていた。アムネマチンⅡ峰の時も視界無しの頂上に立った。快晴の日の１次隊の立てた旗で頂上と分かったしだいだ。

ドラムやブロード・ピークでもそうだったな。

いつの日か快晴の頂上に立って、思いっきりパチパチ撮りまくってみたいものだ。

21世紀の日本と中国

山　森　欣　一

☆はじめに

新しい世紀、21世紀が間近に迫ろうとしている。1891年（明治23年）と現在の日本を比べると、人類の進化の凄さを改めて知ることが出来る。

現在の日本は科学の進歩に伴い、100年前では想像も出来ないほどの、豊かな社会生活を営んでいる。

しかし、これらの繁栄は、僅か50年ほどの間に築かれたものであることもまた、真実である。そして、その50年前の日本は、まさに隣りの国中国を始めとしてアジアの諸国の国土を侵略していたのである。

それが僅か50年でこの変わりようである。人間の持つ怖さをそこに見る思いがする。

現在の豊かな生活は、青かった空や海、緑なす田畑や野山を切り捨てて得たものであったことを、私の世代は切実に感じている。

失ったものの大きさの割には、今の豊かさは間尺に合わないほど小さい。特に、「人」の心にそれを感じる。

☆新局面を迎えた国際社会

自国の豊かさを追い求めてきた日本は、今異常な状態に追い込まれている。気がついてみると、国際経済の中で日本だけが突出していた。「それは日本人の勤勉さ故」と言う弁解は、それが過去においては真実だったとしても、通用しない時代となった。

自由社会の誰もがびっくり仰天した「ソ連」の崩壊は、人類にとって夢の世紀であった「20世紀」に華々しく咲いた「ユートピア」への終えんであるとも言える。

加えて、20世紀をソ連と共に対立し、リードしてきたアメリカ合衆国は、ソ連の崩壊を期に、それまで隠れみのにしてきた「国連」の機能を捨てて、明確に「世界の大国」は、唯一アメリカ合衆国であることを鮮明にした。

さらに、21世紀初頭には中国の近代化に一役買った「長征世代」の長老達が消えていく。そして、その後に緩やかに「中国」の自由経済の時代が到来することは目に見えている。

現代の日本人はあまりにも中国を、アジアを知らなさすぎる。日本の繁栄の後に続いた国は、韓国、台湾、マレーシア等々であった。やがて中国が、ベトナムがそれに続いていくことだろう。

今の直樹が私の年令に達する2025年には、日本経済は、中国やアジア抜きでは到底考えられない時代であり、アメリカ合衆国は遠い国になっているだろう。

中国は、中華の国である。それを知ることが、21世紀に日本が生き残るための中心的なテーマでなければならない。それほど「中華思想」は現代の日本人には理解し難いことである。

今の小中学生達が、中国に馴染んでいることの大切さをもっともっと大人達が真剣に考える必要がある。

▲豪華な四川料理

雪宝頂、敗退の記

江　尻　健　二

＜第一信＞

東京を出て、北京経由、その日のうちに成都に着きました。翌日は四川省登山協会に預けてあったテント、鍋、食器等の隊荷を整理、先に発送してあった個装にもあえました。私の荷の内には、シュラーフに包まれた一升瓶（キャンプ開きと登頂祝用で、ウイスキー等はポリタンクづめなのですが、瓶にこだわる人がいて）も何とか無事のようでした。昼食には成都名物の「陳家の麻婆豆腐」を賞味しました。帰途拝観した「文珠院」では"徳をつめば往生ができる"といった教えに触れました。門前には片足を失い、もう一方の足にも生傷のある青年が物を乞うておりました。

裏庭では老人グループが迎春花のメロディーにあわせダンスに興じておりました。解放後のよき時代に青年期をすごした人々なのでしょう。

四川料理は、ほとんどが辛く、油と辛さにすでに何人かの隊員は腹をこわしていました。この夜の夕食も例にもれず、それに加えて花山椒のしびれが加わり、私も腹こわしの仲間に入ってしまいました。

食抜き、服薬もしたのですが愈らず、それでも２日間のキャラバンをつづけ、５日目には、美しいお花畑をこしてベースキャンプ（中国語で大本営約4,200m）に着き、目の前に雪宝頂の美しいピラミダルな頂をみることができました。前回の報告集でみるより難しそうな山のようです。

翌６日は、ザイルを50ｍの長さに切って束ねる仕事や、近くの丘（4,350m）に囲まれた池まで高度順応を行い、その行き帰りにも、青いケシやエーデルワイス、ばふん草（？）等の美しさを充分にたんのうしました。

今回の隊での私の分担は、"歌集"と"ゴミ"担当です。御存知のように、今、ヒマラヤではゴミ公害を無視できなくなり、そのために、日本にも、ＨＡＴ・Ｊ（日本ヒマラヤン・アドベンチャートラスト）といった組織もでき、余分なものを持ちこまぬだけでなく、持ちこんだものは持ち帰ること（テイクイン・テイクアウト）の運動ももりあがって来ています。可燃物は燃やすとして、カン、ビン等の不燃物は持ち帰りが原則です。カンは、内の残物をきれいにしてから石でペチャンコにおしつぶし、一カ所にまとめておき持ち帰ります。

厄介なのはトイレです。１週間程ベースキャンプにいるのですから、その量も大変なものです。当初は、天幕近くのくぼ地に、ニーハオ式のものを作る積りでしたが、石が多く穴を掘るのが難しいため、河原（ここは日中の一定時間しか流れない）に一定の範囲をきめ、ものはきれいに石で隠し、紙はビニール袋へ回収して燃やすことを決めましたが、ビニール袋がなかみと共に消えてしまうのには参りました。地元の人にとっては、戦後はじめて、我々がセロテープ等に接した時より、もっと貴重なものであり実用的なものなのでしょう。そういえば、5,100ｍのキャンプ１まで張ったザイルも、水晶採りの青年にきれいに持ち去られたとのことでした。

我々が、ＢＣで生活の場を作り楽しんでいたころ、ルート工作の一隊は、長旅の疲れもとれぬ

▲馬で下山させてくれた中国側連絡官とチベット族の仲間に囲まれて

まま、4,700ｍまでルートを開いたようです。夕方、帰って来た彼等には疲労の色が目立っていました。夕食用の一本のウイスキーも殆んどが残る程でした。

翌日は、全員で荷上げをする予定でしたが、私は夜中から左胸部がしめつけられるように痛み、上を向いたままで静かに呼吸をつづけていました。

朝、食事当番をことわり、隊長に今日の仕事を休ませてくれるよう申し入れました。二人の医療関係者が、熱、脈、体調記録等を診た上で、隊長らは、即下山の決定を下しました。下山の前に少しでも体調をよくしておこうとの配慮から、隊の貴重な酸素を３本（１時間半）吸わせてくれたので、少し楽になりました。隊員の手伝いを得て、自分の下ろす荷の整理をするのですが、出発の時は迫られ頭はもうろうです。さて下山するといっても、馬と人の背しかありません。来た時に１時間半乗って、車から下りた処からでも歩いて10時間の距離です。テントの外からは、“江尻さん、馬は大丈夫だろうか”といった会話が聞こえて来ます。出発前に、ガスで見えぬ雪宝頂を背に、初の全隊員そろっての記念撮影を撮りました。もしや、これが最後の～等といったことも頭をよぎりました。

＜第二信＞

午前11時、羽毛服、雨具等をまとい完全武装で馬上の人となりました。

同行のメンバーは山森秘書長、直樹君（13才、ＢＣに着いた晩と翌日、高山病で苦しみ少し元気になった処）、連絡官の小童（20才、四川省登山協会）、馬方の小揚（24才、父漢族、母蔵族でとても勉強熱心）とやはり馬方の小馬（21才、蔵族）と私の６人。馬は４頭と子馬がついています。

過去、私が馬に乗ったのは、日本の牧場で手綱を引かれてグルリ一周したのと、ゲニでは手綱をはなされて小川をひととびした時の怖さの記憶だけですが、とやかくはいえません。キャンプ地をはずれれば、すぐ急な坂道です。馬から振り落とされて等考えても仕方がないので馬に身を任せました。酸素を吸ってよくなったとはいえ、身体をよじったり、せきをすると胸がキュッとしめつけられます。坂もしばらくは我慢をしたのですが、余りの急坂に皆で下馬しましたが、私だけは心臓に負担をかけてはいけないと、小揚が私を背負ってくれました。60kg余を背負わせる申し訳なさと、小揚の背に胸をおしつける苦しさから、一人で歩くといっても即却下です。小揚は先に書いたように学習熱心で、背中で“辛苦了”というと、日本語で何というか、雨が降って来たというと、それは～といった調子で、ポケットから廃紙を出しローマ字でメモをとっています。時にはsit down等の英語もとびだします。私を背負って歩く速度には、山のベテランの山森さんも追いつかず、時にはかけだしたりもしました。私の着ているゴアが彼の背には暑苦しいとのことでした。標高4,100ｍ近いところでのことですから、驚きです。このあたりにも彼らの畑があり、水晶採りの人々は雪宝頂の5,000ｍあたりまでは、何の道具も使わず庭のようにしているのですから、彼らにとっては当り前のことなのかもしれません。

▼歩きながら糸をつむぐ婦人

旧寺院までの急坂が終ってからは、再び馬上の人になりました。しばらくすると馬上の姿勢もよくなじみ、頭上にかかる枝を手でよける余裕もでて来ました。よける枝でよく目につくのは、花山椒で葉は大柄ですが、花はザクロの花を細くしたようなもので、他の隊員がちと噛んだだけで口がしびれるといった代物です。この葉に責任を押しつけることができるなら、私の下痢の一因といってよいでしょう。しかし、寒暖のはげしいこの地では必需品なのでしょう。

登る時にキャンプを張った大溝という川辺のつくりかけの家屋敷に入りこみ、馬には草を噛ませ、我々は行動食（私は乾パン２個と中国ジュースの

み）をとりました。余ったポテトチップ・チーズ・乾パン等を馬方さんにあげようと思いましたが、若し野宿にでもなったら等考え、ポケットにもどしました。

この辺りからは平坦な道がつづき、時にすれちがうのは、2、3のチベット人と黒豚位のものです。

登る時にキャンプを張った夜は、おそくまで多くの人が群らがり、ジュースの瓶を欲しがったり物に触れたりした人々の姿はなく、老人がそっとのぞいているだけでした。

ただ我々が通るとどこからか鳥のような甲高い声が響いてくるのは、いたるところで体験しました。見慣れぬ者の侵入（外国人が入ったのは3隊のみ）を部落の人々に伝えているのでしょうか。そのようなニュースの伝達は意外と早いのかもしれません。

すれちがう青年の表情にはけわしいものがありますが、ニーハオと声をかけると顔はほぼ例外なくほころび、写真を撮ることもOKです。

4年前のゲニの時には見かけなかったものに、糸をつむぎながら歩くチベット婦人の姿がありました。彼女等は牛追い、畑づくり、荷かつぎ等と実によく働いています。

これからは平坦な道がつづき、2、3時間もあれば何とか車にでもつなげるか等と考えていると、突然、段々畑の人ひとりが通れるだけの小路に入り、高度をどんどん上げて、来た時の道ははるか下方になってしまいました。来た時に洞で薬材にするような木根を加工していた処からの谷あいに

▲小動物用の猟銃を使って腕くらべ

入ってしまったのです。

松潘への主道で我々のジープがそれた岷江にはよらずに、山越えをして直線距離を松潘に向かうようです。馬もろとも谷底へなどといった処も幾度か越しましたが、馬に声をかけてやる程の余裕もでてきました。

＜第三信＞

途中、馬に草を喰べさせるからと小休止、松潘に草はなく、彼等2人も折り返し帰らねばならないからと小馬がウィスキーを要求、前途を考えると酒を与えることへの不安はありますが、いずれにしても彼らに任せるより他ありません。ポリタンクからけっこう飲んでいましたが、頼みの綱は小揚が少ししか飲まないことでした。

出発しようとすると今度は、小動物用の猟銃を使っての腕比らべ、成都の川べりでの風船割りでは当たりませんでしたが、今回は私だけが命中。

ここまで読んでいただくと、お前さんは一体何なのだ、それでも病人なのかといった問いがきそうです。

時に雨がポツポツきたりはしますが、時には太陽が顔をのぞかせてくれて遠くの山々も楽しめます。馬ものりおりには手を借りますが、基本的には1人で手綱さばき（？）もでき、馬上でカメラも操作（ブレてるかはまだ分かりませんが）できるまでになり、すっかり馬旅を楽しみ、胸の痛みなどとんでしまい、一体何だったのかと思う程です。

“この山を越えたら～”“あと30分もしたら～”などが何回つづいたことでしょう。間もなく白い天幕が2つ見えました。営林をする人々のもののようで、天井には煙ぬきの穴があき、入口は木の枝でふさいでありました。

すると、我々の前方の道を6、7人の大人と子供がヤクと馬を使って材木を運び上げるのにぶつかり、馬でのヤブこぎを強いられました。ヤブこぎを終えてほっとした途端、後ろが騒々しくなり、みると2頭のヤクが材木をひきづって暴走してくるではありませんか。一瞬ぞっとしました。馬も異常を感じたのか動こうともしないのをやっと途を外させた頃には、ヤクも落ち着いたようでほっ

▼馬にのって3,750mの峠ごえ

としました。

ヤクといえば、いたる処で放牧が行なわれており、我らが行く手をはばみ鋭い角をこちらに向けてじっとしているのは実に不気味なものですが、2、3mのそばまで進むと、こいつ等は害なしと思うのでしょうか途をひらいてくれます。

ヤクの暴走があった峠は、山森氏の高度計によると約3,750m、富士山より高い峠を馬でのんびり越えたわけです。

この峠では兎と雷鳥がいたとのことで、狩りがはじまりましたが、獲物はゼロでした。

ある新聞でアフリカかどこかの地で、子供が素手で小鳥をつかまえる話を読んだことがありましたが、この地では砂などで小鳥に目つぶしをしてから、飛べずにはいまわるのを摑まえるそうです。そんなことがある一方で、峠の人家近くの水呑み場で、我々の馬が水を飲んでいるのを、部落の青年は黙って見てくれてました。動物と人間が共存しているようです。

馬に乗って10時間、やっと目的地の松潘の街が見えだしたところ、小揚と小馬が突然、段々畑にとびこみ、あわただしく何やらとって来て、葉の部分は馬に、そして我々にも食べるようさしだしてくれたのは、何と空豆なのです。日本でもビールのつまみによくでますが"生"のものははじめてです。

皮をむいて口に入れたところみずみずしくて、自然の甘さが口中にひろがりました。後に友人となったチベット女性と釣りに行った折りも同様のもてなしをしてくれました。もちろん彼女の畑のものではありません。

宿の林業招待所に着いたのは夜9時45分、11時間近い長いながい長旅でしたが、小揚と小馬は、その暗い内を再びベースキャンプまで帰って行きました。

我々4人のお尻には、可愛いコブが各2つずつできておりました。

＜第四信＞

前夜、宿に着いたのが夜の10時、朝から胃に入ったのは、乾パン2個、ビスケット3枚、ジュース1本、生の空豆数粒だけ、水欠が致命的な私の身体は、即ビール3本を注文、秘書長に"隊長に報告のしようがない"等といわせてしまいました。

翌日は病人の立場上、病院に行かぬ訳にはいきません。中国での病院生活を体験するのも悪くはないなと、休養をかけて2、3日居る気で参りました。外賓とのことで院長みずからが問診と触診、ついで主治医の検診、いずれも高血圧症と冠心病だが大したことはなく、若干の検査と休養が必要とで、3、4日の入院を決め、即、個室へ。個室故のんびりと思ったら大間違い、次から次への出入り、病院関係者ではないようなので問うてみると、病院内工事をしている電気工、その内坊主あたまの少年が来てどっかりとベット横に坐ってしまうので、聞いてみると蔵族の中学生16歳で、父がこの病院で仕事をしているという。父親が来て、朝の9時から夜の10時まで附添いをさせるから、1日20元とのこと。日本円に直せば500円程、金を払うのはともかく1日横に居られるのはかなわないのと、連絡官の月給が100元にみたぬと思うと何とも切なく断ってしまいました。

リンゲル開始と共に尿意をもよおし、一人処理をするのですが、ちと手の位置をずらすと血液がリンゲルをおしのけ逆流、1びんは満杯、ああ移動式が欲しいといっても没弁法。たまたま顔を出した外科医の先生に頼み処置する始末。

連絡官はどこへ行ったのか帰って来ず、安静どころか、いらいらがつのるばかりで、リンゲルの中止を主治医に頼まんとしている処に主治医が来て、日本人の附添いがないと万が一のことがあっても責任がもてない、早くこの空気の薄い地（約

2,800m）から成都に帰った方がよいとのお達し、渡りに船と速決、点滴の速さも２倍になりました。

治療の話を終え雑談、日本の医療技術をほめてくれたあと、若干の内輪話をしてくれました。あとで念をおされたのでオフレコ。

投薬をうけ一人退院、連絡官に成都への車の手配を打診してみるが容易ではなく、小型バスも５、６万円かかりそうなので、皆が下山してくるのを待つことにした。

＜第五信＞

松潘でのメモをご紹介しましょう。

○秘書長の歯痛どめを買いに行った帰えり、通りすがりの人に、痛みがとれぬ場合、 yapian を使ったらよいとのすゝめをうけました。考えてみれば、この地は魔の三角地帯から左程の距離もないわけです。

○食堂の女子職員から招待され家を訪れました。蔵族の衣装を着せてもらい、彼女等にも着てもらいました。ごちそうになった酥油茶など、ゲニの時とちがい強烈な香りのとれた、程よいのみものでした。街に下りてきたためか、漢族とのつりあいのためでしょうか。長女の別れた夫は漢族の軍人でした。

▲裏が毛皮で暖かく重いが、右手は自由に使える。１人では着ることができない

○わたしどもと接触する青年は、馬方の小揚も、ゲニでの青年も漢族の父と蔵族の母をもつ人の多いことに気づきました。丁度、20代の青年が文革下放時のことのようでした。彼らの前途に多幸を祈るのみです。

○中国での貨幣価値がわからなくなりました。蔵族女性の髪飾りが撮りたくて頼んだところ、“10元なら”に“５元”ではノーで破談。100元の1/20でいとも簡単にかられてしまうのです。

○あとからやはり調子を悪くして下山してきたM氏は、せがまれたのと背負われた礼にと、ゴアの雨具上下を一人に贈りました。翌日、も一人が宿にきて私にそれを求めました。あと10日、雨具は手離せぬと断ると、札束（600元あった）を出して売ってくれといいます。秘書長が帰国10日後に、ミニヤ・コンカに行く時に新品を贈ることで決着がつきました。便利さを求めて彼らの文化もどんどん変っていくことでしょう。

○松潘への中継地点で掲示物を見ていたら、エイズ防止と子供の拒食症の記事がありました。前者は、四川省の特選観光地“九寨溝”と“黄竜寺”への観光ルートの影響によるものでしょうか。我々の往復するあいだにも、観光客を満載したバスがひっきりなしにすれちがっていました。

後者は、やはり“一人っ子政策”のなせるわざなのでしょうか。一人っ子政策の弊害は、子沢山を求める日本でもいろいろ語られていますが、６億が40年で12億、50年で～、60年で～と考えると為政者の苦しみもわかる気もします。それをやりすごす庶民のたくましさも多く目にしました。

＜第六信＞

山での病気のこと。100分の３。

私の病気は前にも述べたように“一体何だったのだろう”と思う程でしたし、後に下山判定を下した友の一人も“誤診だったのだろうか”といってくれた程でした。

のちに秘書長に聞いたところによると、重病人を長時間かけて運ぶ、それも安定さを欠いた馬ではかえって危険な状態に近づけることも充分に考えられ、その点も充分討議をしたとのことでした。発病地点に、医師、酸素、薬品でも豊富にあるな

▼松潘は城壁に囲まれた水豊かな街。
街中心の「古松橋」

らともかく、患者をそのままにしてよくなることもまずなく、ならば万に一つの可能性を求めた方がよいと、現在では問答無用（？）で下ろすのだそうです。

今回の私の場合も、高山病ではないので下ろす必要はないのでは、といった意見もあったが、心臓疾患をおそれて下ろしたとのことでした。

ヒマラヤでは、入山者の3/100が死んでいるという数字があります。当然、山の事故は保険の対象になりません。事故の場合、それに必要な経費は家族負担となります。日本ヒマラヤ協会では、出発前に事故にさいしては、会隊に対し一切責任を追求しない旨の誓約書を入れます。それでも実際には事故がおこると大変なのだそうです。

今回の私の場合、その場だけですみましたが、帰国後、せきがひどくなり医者に診せたところ、マイコプラズマ性肺炎とのことで、そんな身体でよく高所にいけましたねとのことでした。ベストコンディションでのぞまねばならないところを、最悪の状態で行ってしまったようでした。

やや幸いなことに、秘書長父子は頂上を目指してはいませんでしたが、4,200mのシャングリラ（桃源境）での生活を奪ってしまったことを後悔し、申し訳なく思っています。これが全員登頂を目指す隊であったら尚のことでしょう。

帰国後、ベースキャンプからの下山費用、1週間の宿泊費などが、外国人値段でドンと来たのはいうまでもありません。

百分の三にならなかったこと、成都から三百余キロの山あいの街で1週間の生活を楽しんだこと、58歳、5,588mへの挑戦がゴロあわせにおわったことで、この手紙をおわります。

随　想

三　輪　　力

私自身は肝心の登頂はできませんでしたが、四川省の広大な自然と、多くの中国人やチベット人にふれたことが想い出にのこりました。

一番の驚きは、ベース・キャンプ地に着いたときに、走り回っているチベット人の子どもたちを見たことでした。標高の高い土地なので、我々がゆっくり歩くことを心がけていたときのことです。彼らは、タングステン採掘のため、この近辺で家族づれでキャンプしていたようです。アタック・キャンプへ向かうときに、我々と平行する形で登る2人のチベット人を見ました。急斜面を走って登る姿に、高地の住民のたくましさを感じました。

▲大溝の朝（BCへ向う）

登山を顧みて

森　山　安　次

私なりに期間が1週間で5,500～6,000ｍ峰の頂上に登り、安全に登山活動を終えたことについて述べてみます。

1.　標高をバカにするな！

ヨーロッパアルプスなど4,000ｍ級の山を登った者が、今までの最高到達点よりたかが千ｍ高い山でないかとか、今まで7,000ｍ峰に登山した者が、安易な気持で登ることは、事故ないしは高度障害におそわれることがある。特に高度障害は、個人差があり、ＢＣの高さ及び、ＢＣまでの行程の中に高度順応をする標高が皆無の場合が多いからである。今回の登山活動において、自分自身、軽い高度障害ではなかったのではないかと思われた。（体温の変化より）

又山容のきびしさは、何も標高の高い低いは関係ない。

2.　登山活動前の健康管理

登山活動中の健康管理はもちろんであるが、日本を出発してＢＣ入りするまでの健康管理が大切である。特にＢＣ入りの時点で体調を崩していると登山期間中その人は、戦力外となることが大である。私は日本を出発してからＢＣ入りまでの食事の糧は、日常の2/3位にして、お腹の負担を軽くしてすごした。

3.　パートナーシップ

我々の登山はかならず複数の人と、行動を共にして、始めて登頂を成しとげられるのであって一人の主役がいるわけでなく、各自が主役であり脇役であると思う。したがって各自の良い面を引き出し合い、負の部分を補い合い、しかも独走することなく、調和のとれたパートナーであるべきである。

4.　精神力

今回の私の場合を述べると、隊員応募の時からおまえが登攀リーダーで、たえずトップで行動しなければ、この登山は成功しないと言う、おどしを受けたが、これを逆にとって激励として登山活動に入った。登山活動が1週間と短い為、隊の行動予定を予想して、自分の力が、4～5日間、出しきれば、登頂できると言う、確信の元に、トップに立ち、攻めの精神で、危機管理を考えずに登山を断行した。

以上、今回の、登山について述べたが、天候に左右されることが大きいが、個人の行動及び考えによって、成功する、しないが大である。又1週間の登山活動は、2、3週間以上の登山活動の山行より、個人としては、きびしいのではないかと思う。

▲第一次アタック隊ＢＣを出発

思　い　出

戸　部　秀　男

8月6日AM6：50起床、外はまだ暗い。朝食を摂り8：20酒井隊長、山森秘書長以下皆に見送られルート工作隊の森山氏、中居氏、小野田氏、私の4人が出発する。歩きはじめてまもなくモレーン上からはガレ場の連続となり歩き難い。岩場基部取付きを求めて右往左往する。息は15～20歩進んでは休み、ハァーハァーゼィーゼィーゼィーを繰り返す。脈はこめかみでドクドクと音を立てている。しかし、12：00ちょうど、どうやら目標にしていた岩場基部の大岩に到着する。風もなく天気は晴で今まで登ってきたルートが手にとるように見える。またその裾野にはＢＣのテントも小さく見える。大岩がある岩場基部からはフィックス用ロープを出し、私がリードする。ガレ場のルンゼを50ｍ1ピッチトラバースし、その後50ｍ5ピッチ延ばしPM3：30、今日の最高到達点ルンゼ上の小さい岩壁にフィックス用ロープを固定する。途中4ピッチ目を下から偵察で登ってきていた酒井隊長より、トランシーバーでルートの確認をしてもらい指示を受ける。PM4：00大岩があるフィックスロープトラバース地点に残りのシュリンゲ、ハーケン、ハーネス等をデポし、ガレ場を酒井隊長のいる地点まで下降し、隊長と一緒にPM5：45ＢＣに帰る。ＢＣでは皆暖かく迎えてくれる。夕食後、隊長より明日のルート工作隊を発表され、ルート工作の為のシュリンゲ、フィックスロープ、カラビナ等の点検をする。PM8:40シュラーフにもぐるが外はまだ明るい。8月7日停滞、午後森山氏と二人で対岸の湖へ散策に行く。8月8日AM5：45起床。ヘッデンを付けキジ打ちに行くが霧が一面に漂っている。風弱くあまり寒くはない。また目覚る前に妻とロゲンカをし子供になだめられている夢と、仕事場が来客で溢れていて内心あわてている自分の心の内を見た夢をみた。日本を発ってから7日目だがこの様な夢は、どの様な心理状態になっているのだろうか？雪宝頂登山は今日からが本格的だ。今日はＣ1へのルート工作だ。岩場基部までのガレ場のルートは一昨日のルートではなく、酒井隊長の図示したルートをとることになった。AM7：10森山氏、柏倉氏、久保氏、私のルート工作隊が出発する。今日は体調良好である。AM10：20岩場基部の大岩フィックスロープトラバース地点を通過し前回の最高到達地点に着く。ここからは柏倉氏に確保してもらい私がリードする。小雨の中視界がきかず又ルンゼ内の逆層でもろいガレ場の連続に神経を使う。ホールドとする岩は全部といっていい程グラグラと動き、安心感が得られない。それでもどうにかPM2：50稜線上に出る。最後尾が稜線に上がってきたのはPM3：30で大部身体も冷えていた。その後やせ尾根の稜線を岩稜帯のフィックスロープ始点まで進む。ここでトランシーバーで森山氏と隊長との判断で今日はここまでということになり、ロープ、ハーケン等をデポし、PM4：30引き返す。途中稜線直下1ピッチの所で隊長率いる5名の荷上げ隊と出合い、一緒にタコ足で下降する。浮石が足元からどんどん落下し人間、フィックスロープが心配だ。案の定一ケ所フィックスロープが切れかかった場面があり、落石には十分気を付けなければならないと思った。PM7：30ＢＣ着、中国人達が野生の山羊を鉄砲で獲り、唐辛子でまぶした串焼をごちそうしてくれた。夜の食事は皆が疲れているので各自が勝手に自分のを作って食べた。衣類が雨と汗で濡れ着るものが底をつく。（最も着がえを一組しか持ってきていない。）就寝PM10：00。

8月9日、雨で停滞。4,300ｍ以上では雪景色。

初めての海外登山で、しかもルート工作隊のメンバーに入りルート工作をしながら頂上まで行けたということは、大変幸運だったと思っている。日中合同隊で5年前に一度登られていて技術的にはさほど難しくはないと言われていたが、実戦経

験の浅い私には初登のような気持でルート工作を行った感じをしている。限られた登山日数で天候とのにらみ合い。果して登頂できるのか不安だったが、酒井隊長の豊富な経験と知識、英断力により無事8名の登頂者が出たということは、同行者として、導かれた一人として隊長の能力は素晴らしかったと思っている。しかしどんな登山でも反省すべきことはあるでしょう。私は今回の登山でもやはり反省点はあったと思っている。それは一部の隊員を除いては、皆ある程度の技術力は持っているだろうと過信していた。もっと仲間同士打ち明け合う程の話し合い、技術をさらけ出す場が、勇気が無かったものだろうかと…。究極になった場合に本当にその人の姿が見えてくるので、私も含め反省しなければならないと思っている。また考え方を変えると、お互い知らない者同士が今回の雪宝頂登山でお互いを知り、そして少しでもレベルアップができたのではないかと思うと、大変楽しい登山だったと思うと同時に感謝をしています。

▼成都にて

感　想

平　川　宏　子

いつかは、行きたい行きたいと思っていた中国である。食べ物への興味も然ることながら、山水の世界に浸りたいと、単純に思っていた。まさか山へ登るなど考えてもみなかった。しかし、個人旅行が面倒な国なので、暇が出来ても、なかなか実行に移せなかった。

ところが、協会で、観光付で比較的登り易い山があると紹介されていた。それも5,000ｍ級である。初登頂も協会と中国の合同隊ということである。報告書を見ると少し難しそうである。まあ登れても、登れなくても良いことにして、中国行きを決める。

▲成都にて

実際に行ってみて、中国の活気、食文化へのこだわり、豊かさには驚いた。

街に滞在中は、日本にいる時以上に、毎回飽食、飽飲、これで良いのだろうかと思った。山の中では、コックがいなくて自炊だったが、レトルト、ラーメンは充分にあり、ここでも飽食といった感じであった。

問題の山は、発破をかけた跡の様な、ぐずぐずのガレ場、もろい岩稜……と、上部の雪の帽子にとりつく迄が、厭な危険なルートであった。従って、上部よりむしろ下部と稜線の方が、緊張の連続であった。瓦を重ねた様なヤセた岩稜は、一歩踏みはずすと、どこ迄落ちて行くのだろうと思われた。

天候には恵まれなかったが、ガスの中、登頂することが出来た。これも一重に、仲間あってのことと、感謝、嬉しかった。しかし、私にとっては、決して易しい山ではなかった。

「これはまずい」と思って

久保　均

8月4日、標高3,200mの麻病村。登頂の「と」の字も始まらないうちに頭痛が起こる。このままでは登頂は無理かなと少し弱気になってしまう。

翌5日、BCまで一気の登り。途中で、青いケシ・サクラソウを眺めて歩いていると気が紛れたが、BC設営後も、頭痛は一向に止まず、むしろ、横になると強く感じられた。テントの外で、他の隊員たちが乾杯をしている中で、山森秘書長のいやに大きな声がする。

「今、テントの中で寝ているようなのは、頂上は行けない。」

これはまずい。このままでは置いていかれる。自分でも少しは体を動かし高度に馴れるようにしようと発奮し、食堂で酒井隊長の目の前でウイスキーをガンガン飲んでみせた。

翌日、覚えのある感覚＝二日酔いながら気分が良くなり、自分の体と酒の相性の良さに我ながら感心する。（単なるのんべいと言う人もあるだろう）

8月9日、ルート工作も少なくなる。

10日はルート工作及び、C1設営。11日登頂とのことで第一次アタック隊を決めるという10日の夜、緊張しながら酒井隊長の発表を待っていた。（と言うのは、日程をオーバーしているので、もしかしたら……と言う気持ちがみんなにあったと思う）

▲ふいごで風を送り火をおこす

「一次隊、森山、平川、戸部、柏倉、久保」

最初に高度障害に罹りながら選ばれたのは、あの時の酒のおかげかも知れない。

8月10日、朝7時BCを出発。モレーンの上に雪が薄く付いていたため歩きやすく、どんどん先へ進めた。稜線に抜けると小雪宝頂が目近に見える。カメラに収めた後、数分で雲がかかった。

グズグズの尾根道を進み、蟻の戸渡に来ると、遠くの方から歌声が聞こえる。雪女……、まさか。よく見ると、現地の中国人らしき二人の青年が、小雪宝頂側に向かい歌を歌っていた。そのうち、我々に気付き、グズグズ岩の上をズックでぴょんぴょん跳んでやって来るではないか。

「こっちへ来い。」

と、手招きをして我々を呼んでいる。柏倉さんと二人で身振り手振りで聞いたところ、反対側の斜面から登って来たという。また、頂上も行ったのかと尋ねたら、行ったとも言っている。そのズックでは無理だし、フィックスも残っているから、行ってはいないと思われた。行っていないだろう。行っているはずがない。驚いたことに、この二人とは、帰りに麻病村でもう一度会うことになる。

C1予定地到着。平川さんがロープを張り始める。なるほど、これで命が繋がっているのかも知れない。夜がやってきた。風も無く、息苦しくてベンチレーターに顔をつけて外の空気を吸っていた。そのうち眠ってしまった。

11日、曇りの中出発。途中、89年の登頂隊のフィックスロープやスノーバーを発見した。スノーバーは倒れていて、前回よりも雪が少ないのかと思われた。現に、下は氷で、力を込めて打ち込んでも15cm位入れば良いほうで、スノーバーの頭が潰れてしまう始末であった。霧の中、両側が狭くなるに従い、急斜面が緩くなった。と思ったら、

頂上であった。

頂上では、5人で握手をしたり、写真を撮り合ったりした後1時間程で下山した。

私も一つの目的を終え、山そのものの見方・考え方もいろいろ教わった。酒井隊長はじめ、良い先輩・岳友に出会えたことを幸運に思っている。

そして、半年過ぎた今でも思い出すことは、初めてヒマラヤ協会事務所でみんなに会ったときの事である。

「私は、この海外登山は、最後だから……」と言う話をしたら、皆に笑われてしまった。笑われた意味が、今では良くわかる。

初めての遠征登山

柏　倉　秀　克

山での話は他の隊員にまかせることにして、今回の遠征を通じて私なりに考えさせられたことについて書いてみたいと思います。あくまで独断と偏見に満ちた「ひとりごと」として聞いてください。なお、記録（写真）係という役割をいただいておきながら、カメラ故障のためその責任を十分果たせなかったことを深くおわびします。

＜十年ぶりの中国ー人民服からミニスカートへ＞

中国を始めて訪れたのは今から十年前である。半年遅れの新婚旅行ということで中国南部の広州から桂林を旅行した。今回久しぶりに訪れた中国では、近代化や開放政策の影響からかパーマをかけ、超ミニスカートをはいて自転車にまたがる中国版イケイケギャルにしばし言葉を失った。天安門事件の影響か、保守的で口数の少なかったはずの民衆が、多くを語ろうとしている姿にも少々驚かされた。しかしそれらはあくまで表面的な変化の域を出ていないように思われた。基本的には十年前と何も変わっていなかった。幼い頃、日本の農村でみられた光景や、人々のほのぼのとした人情が今だに残っている国、それが中国の現実の姿であると思う。

＜多民族国家中国＞

それまで教室で何気なく「中国は多くの民族で構成されている」と教えていたのだが、今回、回族やチベット族などの少数民族と接触する機会を得て、多民族国家の複雑な現実を実感することができた。これは我々日本人にはとうてい理解し得ない感覚と思われる。制度的には少数民族にも自治権が認められており、何等不都合はないはずなのだが。漢族の人とチベット族の人との間に、何かしらしっくりいかないものを感じたのは私だけだろうか。

歴史的には漢族と他民族間で激しい争いが続いた事実がある。加えて文化や宗教、そして言語の根本的な違いがある。これらがさまざまな場面において目に見えない圧力となって存在している印象を受けた。日本がもし中国王朝の支配を受け中国領内に位置づけられているとしたら、さしづめ我々も少数民族の一員となっていたわけで、まんざら他人事でもないように思われた。ベースキャンプまでは地元の農民のお世話になった。彼らは総じてのんびりしており、人なつっこく親しみやすかった。成都から同行していた連絡官や通訳の人々以上に親近感を感じることができた。このなんとも言えない親近感は日本人のルーツと何か関係があるのかもしれない。

＜中国人にとって登山とは＞

遠征登山というのは不思議な登山である。外国へ行き、現地の政府機関や役人を巻き込んだ形で登山を経験して、こんなことを思った。先進国に住み、生活水準もある程度高くなってきた日本人にとって、遠征登山はあくまでも趣味や余暇としての登山の延長線上に位置している。ところが中国の登山家となると事情も違ってくる。彼らの社会においては個人が余暇と私財を利用して山に登るということ、これは一部の例外を除いてまだま

だ不可能な段階にある。従って、彼らにとって登山とは、一方で国策としての－数々のヒマラヤ遠征に代表される－登山と、他方では外国の登山隊の受け入れ業務とそれによって派生するビジネス、これら両面の性格を併せ持っている。今回の遠征中も中国登山協会や四川省登山協会の協力を得たが、これらの組織は日本における日本山岳会や各種山岳団体とは根本的に性格を異にするものであった。これらを日本人に理解しやすく説明するとインストラクター常備の国立登山専門旅行代理店とでも呼ぶことができよう。

＜公募隊という集まり＞

公募隊については、かねてからそのメリットやデメリットが議論されている。全国に散在するヒマラヤ協会会員の中から、それもほとんどが初対面というメンバーによって構成される隊。初めはどうなることかと不安だったが、そんな不安もあっと言う間に解消されていった。私たちには山が好きで、とにかくいつかはヒマラヤに行きたいという大きな共通項があった。それに加えて、山森専務理事をはじめヒマラヤ協会の蓄積された遠征登山のノウハウ、現地登山協会との友好的な関係、酒井隊長や平川隊員の輝かしい高所登山経験、こうした無形の財産の上に立って今回の隊が成り立っていることは言うまでもない。

今回公募隊としての本隊で唯一問題点として感じたことは、各隊員の技術や経験、登山観などの相互認識が十分になされていなかったと思われる点である。それが行動面で何らかのブレーキとなっていたような気がした。富士山での事前合宿は大変有意義なものであった。ただ欲を言えば、全員が参加できる集まりをもう少し持てたらなあ、と思うのも実感である。全国的な広がりを持つ隊で、今回以上に合宿を計画することは不可能に違いないのであるが。

▲ＢＣでの焼肉パーティ

たった8ヵ月前なのに

中　居　満　穂

雪宝頂、初めてその名を聞き写真を見たのは去年の1月か2月だったと思う。久保さんが行くということだった。“あぁーいいな、すごいな”と思いつつ、その写真に見入ったのを覚えている。まさか自分が行くことになろうとは全く思わなかったが、すっきりした真っ白な頂稜とその名“雪の宝の山”が妙に心に残った。

行って帰ってきたことが随分前のことに思えるが、今こうして思い返してみると次々とあの時の情景が湧いてくる。そう、たった8カ月前なのだ。

富士頂上で風に吹かれテントが破けた一夜、
チベット族の人と村々、
足の置き場もないほどのエーデルワイスorウスユキソウ、
見たこともないたくさんの色とりどりの高山植物、
魔除けの布、
ヤクと牛飼いの子供、
マニ石と廃寺、
地層がうねる対岸の山、
滝の源の氷河湖とその奥の聖地を感じさせる無数の石組、
ＢＣから見た氷河を布陣し雪煙の舞う雪宝頂の神々しい姿、
頭ガンガン高度障害、
人懐っこい道案内のオヤジ、
夜のサイコロ、
馬方のカラミ酒を受けてなだめる隊長、
野性の山羊の解体と焚火とチベットの若者の歌、
Ｃ１での無風の不気味な静寂、
夜中の息苦しさとテントの凹凸床、
そこで見た星明りにおぼろに浮かぶ深夜の頂稜、
翌朝のアタックでの同行二人の足の速さ、
頂上での握手と合田の笑顔、
初登の浮いたスノーバーの記念品、
帰りの震度15のトラクターの荷台からみた小雪宝頂と花も終わりの草原……。

日本の山といったい何が違うんだろう、と今考えてみると高度ではないかと思う。高度は違う世界（自然、その他）をつくっているんだと。私の体も4,000ｍちょっとでびっくりしたらしく講習会で聞いたとおりの反応を示した。

海外登山、高度、混成パーティーetc、日本での普通の山歩きしか知らない私がいろいろ貴重な体験をさせてもらった。隊長の的確な判断、他の隊員の技量・力量の余り、天候あるいは山の助け（落石に当たらなかったことも含む）を貰って登れたようなものであった。それらすべてに感謝、感謝である。帰ってきたその晩たべた寿司と日本食とビール、ああ日本・うう日本であった。

それでは

大家、祝你身体健康・登山安全　　再見／

「hé tián yòu jiè」

合　田　祐　介

中国に限ったことではないが、海外を訪れる際、自分の名前がその土地でどのように呼ばれるのか仲々興味深い（できれば中国人らしい、歯切れの良い響きであって欲しい）。しかし私のそうした期待は、隊長から渡された一枚のコピーによって無残にも裏切られた。そこには隊員の名前とローマ字表記による発音が記されていた。

「これ、何て読むんでしょう。」

恐恐として江尻さんに尋ねる。

「ヘーティアン　ヨウジェ」

ウーム、どうもピンと来ない。目を転じれば、「サンルン　リー＝三輪　力」「リー」が効いている。山森さんや森山さんも「シャンセン」と、心地良い響きで羨ましい。とは言え、小野田さんは名字が（中国人に比べれば）長すぎるので、少々気の毒（？）だ。

先日韓国を訪れた際、光州の大学生に私の名前を発音してもらった。

「hap choen ○ gae」

「祐」の発音は、この漢字が存在しないのか、知らないらしい。それでも「ハプチョン」とは、リズム感があって思わず溜飲を下げる。「江戸の敵を長崎」ならぬ「中国の敵を韓国で」であった。

韓国から帰国して、実家で一冊の書物と出会った。以下の記述に思わず目がとまった。

……羅老師はしゃべりながら白墨をつまむと黒板に大きな字で

「日本同学、西園寺一晃」と書いた。

「シーユアンスーイーホアン」

「シーユアンスーイーホアン」

静まりかえっていた教室のあちこちから学生のつぶやきが聞こえてきた。ぼくは『西園寺一晃（シーユアンスーイーホアン）』と、ぼくの名前をくりかえし読んでいる学生たちのつぶやきを、くすぐったく感じると同時に、教室内のシーンと張りつめたような緊張が、これで破れたようでホッとした。（中略）彼らの目にはきっと、顔かたちは自分らと少しも変わらないぼくがおかしな恰好（ぼくは日本の学生服を着ていた）をして立っているのが奇妙にうつるのだろう。それ以上に、『西園寺一晃』という名前が長ったらしくて、どこまでが姓でどれが名前なのかわからず不思議なのだろう。盛んに『シーユアンスーイーホワン』をくり返している。（西園寺一晃「青春の北京」中央公論社）

同じ名前でも、発音によっては様々に異なる印象を与える。それは奇異で、肌に合わないものを感じさせるが、同時に異文化下の初対面の人々とのコミュニケーションの契機ともなり得る。

「言葉って、面白い！」

◀BCでメートル上がる

はじめての中国

山　森　直　樹

飛行機から降りて中国へついた時は、やっとついたと思いました。中国に行っても日本人はいました。北京へついてすぐ成都へ行った時一日に2回も飛行機に乗るとはおもいませんでした。成都に着いた時はすでに夜になっていました。車でホテルにむかう途中、はじめは人も少なかったけど、すすむにつれて、だんだん人が多くなって11時ごろだというのに子供が多かったのでおどろきました。

次の日、食糧を買いに行きました。野菜、果物、肉等いろいろ買いました。まわりにたくさんの店があり、鳥の皮をはいだ肉や、スイカの大きいやつとか、唐がらし等がたくさんうっていて日本の市場と売りかたが全然ちがっているのがおもしろかったです。あとガソリンスタンドや、自動販売機などがなくて、中国はまだまだおくれていると思いました。車に乗っている時、道に人がどうどうと歩いているのを見て、あぶないけど中国らしいなと思いました。

三日目、車に乗って目的地"松潘"まで行く道のりは、長くてとてもつかれました。四日目、車で奥地まで行ってそこから歩いて行くことになりました。歩いている途中だんだん頭が痛くなってきました。でもがんばって歩きました。途中、石がつんであってその上に槍がたくさんたっている物がたっていました。何だかよくわからなかったけどめずらしかったので写真をとりました。歩いていく途中に村があり、その村のある場所がとても高い所にあるので頭痛くならないかなあと思いました。やっと目的地について、テントをはる時に頭が痛くて手伝えなかったけど、ご飯をあっためるのをみはっていました。みはっていたらむこう（村の人）が3～6人集まってきました。どうしていいのかわからなかったけど、なにかするまで何も言わないことにしました。集まっている人達の中には子供も何人かいて、見るとタバコをすっているのでおどろきまくりました。その日の楽しい夕食が終ってから次の日は体が好調でした。

山に登る時、みんなにおいていかれないようにしようときめました。そしていっしょうけんめい登りました。途中、寺のあとや家のあとがありました。めずらしい花なども見れてよかったと思いました。最後のほうから頭痛がしてきて、キャンプの所についた時はとてもつらかったです。そして、その日は夕食を食べずにそのまま寝ました。頭痛でなかなかねむれなく、苦労しました。次の日は、一日中寝ていて非常用の酸素もすいました。

その次の日はもう体のちょうしがよかったので少し上までいけるかなと思いました。だけど江尻さんの急病でしかたなく山を下りることになってざんねんだったけど下りました。でも雪宝頂が見れてよかったです。下る時は途中まで歩いて下りました。それから馬で下りました。乗ったことは何回かあるけど長時間乗るのは、はじめてでした。急な坂を下る時は大変でした。腰がとてもつかれました。銃をうちました。的には当たらなかったけど感激しました。

次の日江尻さんのことがしんぱいだったけど病院に行ったら、悪いところはほとんどないといっていたので安心しました。それからみんなが帰っ

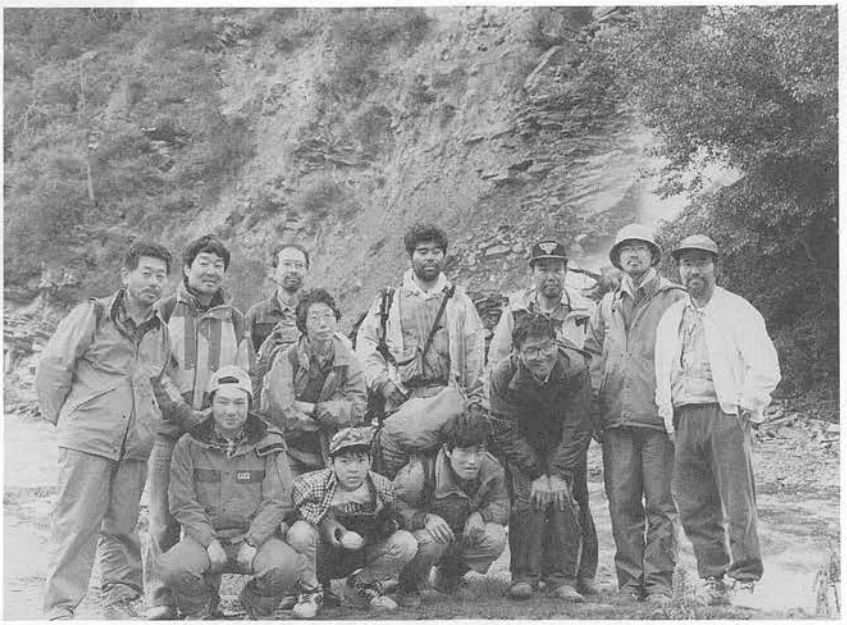
▲松潘での山森父子

てくるまで松潘の見学でした。2日たつとだいたい町がわかってきました。釣りにも行ったけど一匹もつれなかったのでざんねんでした。トイレがとてもきたなかったし、食べ物も味がこかったのでなかなか食べられませんでした。繁華街に行くと牛の頭だけが売っていたり、牛をさばいている所を見ておどろきものでした。豚がとても多くいました。何日かして三輪さんが山から下りてきました。三輪さんも同じ病院でみてもらったけどだいじょうぶでした。そして下山してくる日がきて成功するかな？と思いながらまっていました。

トラクターに乗ってみんなが帰ってきて成功したと聞いた時は“よかった”と思いホッとしました。松潘から成都へついて“武こうし”やきり絵、竹の細工工場等を見学しました。みやげを買うのが大変だったけど中国らしさ？みたいなものをかんじて改めて中国（外国）へきていることを実感していたような気がしました。

成都から北京へ行って、とてもゴ～ジャスっぽいホテルにとまってよかったです。北京滞在は短かかったのでよくおぼえていないけど“万里の長城”のことだけは、おぼえています。暑かった…。あっという間に中国滞在きかんが終ってしまいました。日本へ帰る時もう少し長くいたいような気がしました。

雪宝頂には登れなかったけど、ぼくなりに大きな経験をしました。また機会があったら中国へ行きたいなと思っています。最後に雪宝頂隊員のみなさん、いろいろ迷惑をかけましたが最後までめんどうをみてくれて本当にありがとうございました。



▲下山時、大姓にて

この夏 海抜5000mの世界へ

中2 四川省の最高峰に挑戦

江戸川区の中学生が、この夏休み、登山家の父親とともに、中国・四川省の雪宝頂（五、五八八㍍）登山隊に参加することになった。富士山や北アルプスの主な高峰など、国内での登山歴は豊富な中学生だが、海外の山に挑戦するのは初めて。それだけに「海抜五千㍍の世界がどんな所か、しっかり見てきたい」と張り切っている。

江戸川の山森君

登山家の父と初の海外遠征

今夏、中国・四川省の雪宝頂登山に挑む直樹君（左）と父親の欣一さん

この中学生は、江戸川区立葛西第二中学二年生で、日本ヒマラヤ協会専務理事の登山家山森欣一さん(四七)の長男、直樹君(一三)。同協会の派遣する十三人の雪宝頂登山隊に、親子ともども参加する。

雪宝頂は、中国・四川省の北部にそびえる岷山山脈の最高峰。ピラミッド型の美しい山で、チベットの人びとが、聖地としてあがめてきた信仰の山でもある。

五年前の夏、同協会と四川省登山協会の合同登山隊が初登頂に成功しているが、その後の挑戦はなく、これが二度目の試みになる。欣一さんは「雪宝頂は雪よりも、落石の方が危険だが、ほどよい傾斜で比較的登りやすい」という。

今回の親子登山は、「最近、子供が自然に接したり、自然と闘ったりする場が少ない。青少年が現地の人たちと交流する意味も大きいのではないか」と考えた欣一さんが直樹君を誘った。

登山隊は夏休みなどを利用した比較的短期間に、高峰登山を楽しみたいという会員の希望で計画された。

四川省北部にそびえる雪宝頂

来月一日に成田を出発し、四日ベースキャンプに入り、九日、十日と頂上を狙い、その後の予備日を含め二十一日に帰国する予定。

直樹君は山頂アタックには加わらないが、標高四、一七〇㍍のベースキャンプに滞在し、標高五、一〇〇㍍の第一キャンプまでは登る計画。隊のメンバーとして気象を担当し、午前八時、午後二時、午後八時の三回、気象観測を行う予定だ。

直樹君は、欣一さんに連れられて、小さい時から山に親しんできた。これまでに富士山、北岳、穂高岳、剣岳など、国内の代表的な山の頂を踏んでいる。

しかし、体質的に高山病に弱く、本人は「五千㍍の高さだと酸素はかなり薄くなる。高山病は苦しいし、最初は行かないつもりだった」という。しかし、「いまでは自分の体がどうなるのか楽しみでもある」とか。

「父から高山では星がきれいに見えると、何度も聞かされている。降るような星空をじっくり眺めてみたい」。そう話す直樹君は、登山隊の拠点となる四川省の成都が、最近、興味を持っている「三国志」の蜀の都でもあることから、「町並みや人びとの暮らしの様子もよく見てみたい」と、楽しみにしている。

第Ⅲ部

隊務報告

・登　攀
・装　備
・食　糧
・気　象
・医　療
・庶　務
・ゴミ対策
・準備日誌

1. 登　攀

今回の登山では、ルートについては、1986年の初登頂したＨＡＪ隊々員からの各種の助言や報告書を読み、初登頂と同じルートを採用し、ルートのイメージを作り上げて、ＢＣに入った。

ＢＣからの山体が、ガスで一部は見えなかったが、稜線までのルートはＢＣでテントを設営している時に決まった。登山活動の初日のルート工作では、後で登下降したモレーンより右手のモレーンを登りだした為に、傾斜のきつい斜面を左にトラバースするはめになってしまった。

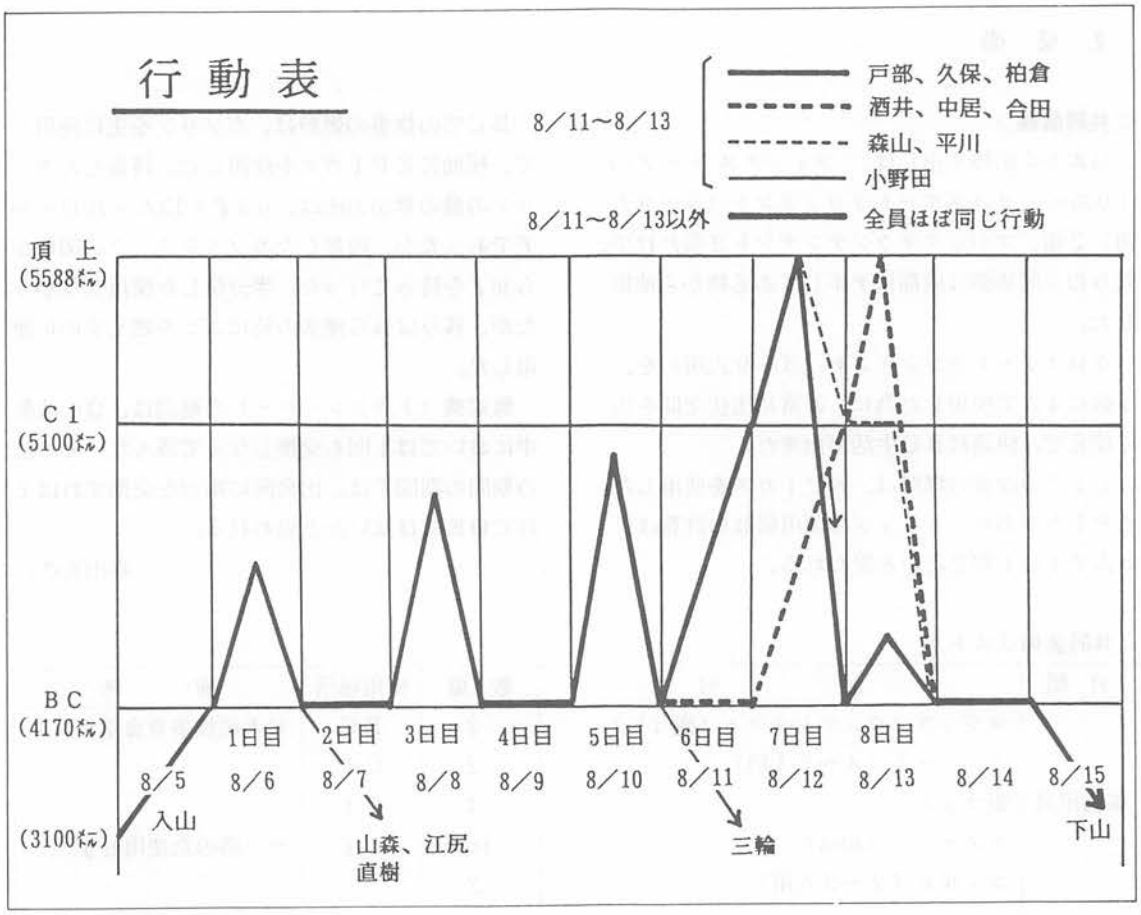
初登頂時にトラバースしたと思われる所に着いた時、あたりにガスがかかり、トラバース後、稜線まで延びているルンゼの位置がはっきり確認できない状態でいる時、下部から隊長の無線連絡でルンゼの位置を確認し、ルンゼの下部まで行き、ルンゼを２ピッチ、ルート工作をして１日目はＢＣに下山をした。

２日目は昨日の最高到達点から、ルンゼの右側壁にそってルートを延ばしたが、岩の風化が激しく、岩と言うよりか石を積み重ねた様なものなので、ハーケンのききはあまく、フィクスロープに全体重を加えることは危険であった。

ルンゼの出口からＣ１までの稜線は2/3は石を積み重ねたヤセ尾根でありさほど心配する所ではなかった。残りの1/3は岩尾根で10ｍ位の登下降する所が１ケ所位で、後は２、３ｍの登下降であるが岩は風化している為、フィクスロープに全体重を掛けることは危険であった。

Ｃ１からの雪稜は傾斜が増してくるまで、なるべくロープの使用をしないで登攀をした。

稜線はやわらかく氷化した状態であり、右側は切れ落ちており、左側はゆるやかな斜面になって



おり、しかもガスの為に、初登頂のルートよりさらに左側の斜面を直線的に登高していくのではなく、ジグザグに登高した為に時間をだいぶ浪費してしまう原因にもなった。

ロープを張りながら登り出し、手持ちのロープが後1本になった時、右手4～5mの斜面を見ると、初登頂時の残置ロープを見つけ、これを借用して2ピッチ、登ったら傾斜もゆるやかで湿った雪面になり、それから1ピッチで頂上であった。

フィクスロープは、稜線に出るまでに予定していたより数本、多く使用した為に雪稜上で不足したのであるが、残置ロープがあったので、これを使用して助かった。

ボルト、アイスハーケンは持参したが、使用する様な状態ではなかった為に使用しなかった。

ロックハーケンは岩がもろかったが、だましだまし使用したし、スノーバーは雪稜だけでなく、稜線までのルート工作や、C1のテントの設営などに、数本使用した。

＜登攀用具リスト＞

●共同	フィックスロープ	8φ×50m	
	メインロープ	8φ×50m	3本
	スノーバー		
	ロックハーケン		
	シュリンゲ		
	カラビナ		
	アイスハンマー		2個
●個人	アイゼン		
	ピッケル		
	ヘルメット		
	ゼルブスバンド		
	下降器		
	ユマール		
	カラビナ		
	シュリンゲ		

（森山安次）

2. 装　備

＜共同装備＞

日本からの持ち出しは、フィックスロープの1,000m、クロスタードドラゴンテント（8～9人用）2張、マジックマウンテンテント2張だけで、残りの共同装備は成都にデポしてある物から使用した。

クロスタードドラゴンテント（8～9人用）を、1張に4人で使用した為に、非常に居住空間を広く使えて、快適にBC生活が出来た。

C1での炊事の燃料は、EPIガスを使用した。EPIガスのカートリッジの使用個数の計算は、3人で1日1個でよいと思われる。

BCでの炊事の燃料は、ガソリンを主に使用して、補助にEPIガスを使用した。持参したガソリンの量の算出方法は、0.3ℓ×13人×10日＝39ℓであったが、持参したガソリンタンクの関係から36ℓを持って行った。半分位しか使用しなかったが、残りはBC撤去の時にゴミを燃やすのに使用した。

無線機（トランシーバー）の電池は、登山活動中においては1回も交換しなくて済んだ。この位の期間の期間では、出発前に電池を交換すればそれでOKではないかと思われる。

（森山安次）

＜共同装備リスト＞

分　類	品　　目	数　量	使用場所	備　　考
幕営用具	マジックマウンテンテント（底なし）	2	BC	日本側炊事兼食堂テント
	エスパース（4～5人用）	2	C1	
	銀マット	4	C1	
	スノーバー（40cm）	16	C1	ガレ場の為使用せず
	ツェルト（2～3人用）	2		

分類	品目	数量	使用場所	備考
幕営用具	ローソク	2	C1	
	ミクロテックステント（4人用）	3	BC	2張は中国側に貸す
	クロスタードラゴンテント（8～9人用）	3	BC	
	ペフマット	15	BC	
	ハイピーシート	4	BC	2つはテントのフライに使用
	スコップ	2	BC	
	EPIランタン	3	BC	
	EPIガス	14	C1	4個使用
	ガソリン	36ℓ	BC	
	給油ポンプ	1	BC	
	メタ（20個入り）	6	BC	
	夏テント（7～8人用）	1	BC	中国側炊事用テント
炊事用具	ホエーブス	3	BC	1個不良になる
	EPIガスヘッド	3	C1	1個は予備
	圧力釜	1	BC	
	コッヘル	4	BC・C1	BCで2、C1で2
	ポリタンク（10ℓ）	3	BC	
	ポリタンク（2ℓ）	4	BC	
	ベニヤ板	4	BC	
	缶切り	3	BC	
	包丁・しゃもじ	各1	BC	
	ザル	1	BC	
	テルモス	3		
	タッパウェア	3	BC	
	食器・フォーク・スプーン	各13人分		
登攀用具	メインザイル　（9㎜×50m）	2本		
	フィックスロープ（8㎜ P.P）	800m		
	フィックスロープ（8㎜ナイロン）	200m		
	スノーバー　（60cm）	10本		
	ハーケン	20		
	シュリンゲ	40		
その他	無線機	3		
	ドライバーセット	1		
	プライヤー	2		
	O_2 パック	4		
	キャンドル30分	14		
	血圧計	1		
	針金	1巻		
	温度計	1		
	P.Pバンド	1巻		
	ビニール袋	多		
	HAJ旗	2		大小各1

3. 食 糧

＜基本方針＞ ○ 軽量化にはそうこだわらない。

○ Take in Take out の実践。

○ ＢＣ食とＣ１食は区別しない。（但し、F. D. 食品、缶詰は除く。）

○ α米は一食 120 g、ラーメンは１袋。

○ 主食がα米の時は汁物をつける。

○ ティーパックは、１回３袋で４人分の計算。

○ 飲み物は、１日４～５回飲む計算。

○ 生野菜、肉、調味料の一部を現地調達。

○ 12日分（ＢＣ滞在分）とする。

＜食糧計画＞

○ 夕食

1) 親子丼（3）、中華丼（1）、マーボ丼（2）
材料・レトルト、α米、漬物、味噌汁。

2) カレー＆ポテトサラダ（3）
材料・レトルト、α米、福神漬、スープ、マッシュポテト、ホタテ缶、マヨネーズ

3) ちらしずし（2）
材料・素、α米、漬物、味噌汁、缶詰。

○ 朝食

1) ラーメン（4）、カレーうどん（2）
材料・めん、スープ。

2) お茶漬（2）、雑炊（3）
材料・α米、素、漬物、味噌汁。

○ スペシャル食（各１）
天ぷらそば、チキンラーメン、赤飯。

○ 昼食
カロリーメイト、ビスケット、カンパンを中心にした。他に、あめ、チーズ、ポケメシ、丸ぼうろ、ガム。

○ 調味料
醤油、塩、砂糖、にんにく、しょうが、コショウ、唐辛子、だし、わさび、ふえるワカメ、青海苔、マヨネーズ、紅しょうが、干エビ、切干大根、チーズ、酢、コンソメ、梅干、塩昆布、ふりかけ、魚缶。

○ 飲み物
日本茶、紅茶、ポカリスウェット、コーヒー、ココア、スープ

＜雑感＞

高度の影響もあり、特に、高年者にとってα米の量が多すぎた。ジャガイモをふかしたり、現地で入手した山羊肉の焼肉等、隊員には好評であったようだ。 （合田祐介）

＜現地購入食糧品について＞

生鮮食料品は成都にて購入。梱包後、ＢＣまで４日間。３日目には、トマトもスモークビーフも腐敗していた。時間があれば、こういうものは、松潘で購入して、隊員が運んだ方が良かったかと思われた。

青とうは、外観は日本のものと同じであったが辛くて辛くて食べられなかった。

酢、油などは計り売りなので、容器を持参しなければ購入できない。酢は黒酢で甘すぎて、口に合わなかった。

リンゴは多めに買って行くと、行動食に好評である。玉葱は多すぎた。

＜現地購入食糧品リスト＞

品　目	購入量	使用量	価格 500g(1斤)宛
玉葱	13 kg	4.3kg	0.5 元
馬れいしょ	13 kg	11 kg	0.35元
キャベツ	6 kg	6 kg	0.4 元
ナス	2 kg	2 kg	0.3 元
リンゴ	3.5kg	3.5kg	1.4 元
ナシ	52 個	52 個	0.6 元
キュウリ	3 kg	3 kg	0.2 元
トマト	6 kg	腐敗	0.6 元
ニンニク	0.5kg	少量	0.8 元
ショウガ	0.2kg	0	1.2 元
青とう	3 kg	からくて捨てる	0.5 元
塩	0.5kg	少量	0.32元
酢	0.5ℓ	甘くて使用せず	1.77元
スモークビーフ	0.5kg	腐敗	6.5 元
たかの爪	0.5kg	少量	5.2 元

※１元＝¥26.7　　成都にて購入

（平川宏子）

4. 気 象

雪宝頂隊気象記録（場所・天候・気温）

日	7：00	12：00	17：00	備　考
8/1	東京・晴・暑	・・	北京・晴・暑	
2	成都・曇・暑	成都・曇・暑	成都・曇・暑	
3	成都・曇・28	茂汶・・13：30 27	・晴・	
4	松潘・・	・・14：10 14	大溝・小雨・	
5	大溝・曇・8：00 11	廃寺・曇時々雨・17	BC・曇・20：30 8	夜半一時雨
⑥	BC・・7：30 11	BC・・	BC・・	
⑦	BC・濃霧・9：00 9	BC・曇時々雨・12：30 12	BC・曇・21：00 9	
⑧	BC・曇・9	BC・曇・	BC・小雨・	
⑨	BC・雨・	BC・雨・	BC・雨・20：30 7	全員行動中止
⑩	BC・快晴・	BC・ガス・	BC・ガス・	
⑪	BC・晴・	BC・晴・15：00 23	BC・曇・18：00 9	
⑫	BC・曇・6：00 4	BC・キリ雨・	BC・キリ雨・	
⑬	BC・・	BC・キリ雨・	BC・・	
14	BC・雨・	BC・みぞれ・	BC・雨・19：40 6	一日中　雨
15	BC・曇・2	大溝・曇・10	・・18：35 15	
16	松潘・晴・12	茂汶・・	・・16：00 29	
17	成都・晴・10：30 31	成都・晴・12：40 31	成都・晴・16：30 32	
18	成都・曇・9：00 28	桂湖・曇・13：30 29	成都・・	
19	成都・雨・10：00 26	成都・曇・	成都・・15：00 26	
20	成都・濃霧・	北京・晴・暑	北京・晴・暑	
21	北京・晴・暑	北京・晴・暑	・・	

（中居満穂）

5. 医　療

5月の富士登山合宿のテント内で、どの様な医薬品をどの位の量を持って行けばよいのか皆で話し合った。その時、ある隊員より今度の雪宝頂登山の日程、山の標高、8月という季節から考えて、各自が自分に必要な医薬品を持っていけばよいのではないかという提案が出された。もちろん各自では持てない酸素器具類、抗生物質等特別な医薬品は全体装備として医療係が持参してはと…。初めての海外遠征で初めての高所登山という私には、医療係という責任感からこの意見は参考になったが、若しもの場合を考えるとどうしても不安になり5年前、初登頂時の際の医薬品リストを参考にし持参した。結果的には大部分の医薬品が未使用になったが、それでも人里離れたあの奥地でのテント生活を考えると、お守りとしても十分その任務を果たしてくれたと思っている。

今回の登山では高所順応がうまくいかなかった為か、あるいは自己管理が悪かったのか殆んどの隊員がBC入りと共に体調を崩し、頭痛、呕気、息苦しさ、目まい、脱力感等に悩まされていた。しかし、その症状もそれ程強くはなく登山活動に支障はなかったように思っている。ここに特に症状の悪化が心配され、BCより撤退された江尻氏と三輪氏について私の記録書をもとに記しておきます。

江尻氏

8月7日、午前7時15分

昨夜9時頃就寝するが、入床直後より胸苦しさを感じ、体動時は特に息苦しく、仰臥位が楽で一晩中ずっと仰臥位で休んだ。しかし、ほとんど眠った感じがしないので睡眠薬を欲しいと訴える。

体温37.3℃、脈拍102（1分間）、呼吸数29（1分間）、血圧192/108 ㎜Hg（江尻氏の話しによると高血圧で漢方服薬時は160/80 ㎜Hg、服薬しない場合はおよそ180/120 ㎜Hgとのこと）。顔面やや浮腫を認むが肺雑音（−）、咳（−）、また、右胸部は大丈夫だが左胸部（心臓？）が締めつけられるように痛むという。8月4日（松潘より麻病村へ移動しテント泊日）頃より軽い頭痛があり、息苦しさも感じていたと言われる。

参考）8月4日体温37.5℃、8月5日体温36.8℃、8月6日体温37.0℃

午前7時50分

酸素吸引施行す。（10：00まで）

酸素吸引すると左胸部痛、呼吸が幾らか楽になったと話す。酒井隊長、山森秘書長、平川氏（元看護婦）、私の4人で症状、病態について話し合い、その結果心臓疾患の疑いがあり、ここBCに居るだけでは好転するとは思えない、下山して入院が必要ではないかという酒井隊長、山森秘書長の判断により、下山し病院入院と決定される。

午前11時05分

荷物をまとめ馬にまたがり、山森秘書長、直樹隊員に付き添われ、霧もやの中松潘の病院へ下山となる

三輪氏

8月9日、午前8時35分

咳を一晩中していて、朝もシュラーフより出れないでいるとのことで三輪氏のテントへ行く。咳（コホン、コホンと乾いた咳）、ぜんそく的な咳が間断なく有。体温37.2℃、脈拍92（1分間）、呼吸数24（1分間）。血圧148/72 ㎜Hg（平常時118/90 ㎜Hg、三輪氏の言うには）、呕気（少しあり）、腹痛（−）、胸部痛（少しあり）、頭痛（少しあり）、顔面浮腫（−）。BC入りした8月5日頃より咳は出ていたが昨晩より多くなった。起き上がるとなお一層多く出るので寝ていた。（テント同居隊員は昨晩ずっと咳込んでいたようだと言う。）また、昨日は対岸の湖へ皆と一緒に登ったが、体調がおもわしくなく途中下山したとのこと。

参考）8月8日体温37.0℃

8月10日、午後8時30分

荷上げの行動日であったが一日中テントで就寝していたとのこと。大便昨日1回、今日1回。小便昨日2回、今日1回。顔面浮腫（−）、食欲（有）体温37.4℃、脈拍60（1分間）、呼吸数24（1分間）、血圧148/64 ㎜Hg。食事、トイレに行くのが面倒なので、ずっとテントで寝ていた。食事（夕

食）はテントに持って来てもらいたい。富士山登山（雪宝頂合宿）時はかぜをひき咳をして皆に迷惑をかけた。下山後も学校で他の先生方に咳で迷惑をかけた。海外は４度経験しているが今度のように多勢で行く登山は初めてで、咳で皆に迷惑をかけている、とかなり消極的になっている。私の憶測だが、たぶん三輪氏は高度順化がうまく行かず軽い高度障害による一時的な情緒不安定になっているのではないかと思った。

翌８月11日アタック隊がＢＣを出た後９時20分、馬工と一緒に馬で下山し、松潘の病院へ入る。

その他、寝違いによる頸部捻挫の隊員。かぜをひいた隊員。膝関節の古傷を悪化させた隊員等いましたが、大事に到ることもなく無事登山活動を行なっていました。

最後に、今回の登山に際して、医薬品提供に御尽力、御協力頂きました帝京大学溝ノ口病院眼科医長の難波克彦先生、フタミ薬品(株)西平哲男様に厚く御礼を申し上げます。

（戸部秀男）

＜健康チェック表＞

（無…×　有…○　激…◎）

月日														
天気														
起床時刻														
脈拍数														
呼吸数														
体温														
睡眠時間														
頭痛														
倦怠感														
吐き気														
息苦しさ														
食欲不振														
下痢														
便秘														
腹痛														
目まい														
むくみ														
移動高度														

＜医薬品リスト＞

薬　効	品　名	容量・個数		備　考
ビタミン剤	新ポポンＳ	240Ｔ	1	風邪でもよい
下痢止め	正露丸	480Ｔ	1	
整腸薬	新ビオフェルミン	320Ｔ	2	下痢でもよい
風邪薬	ＰＬ顆粒	300包		昼飲まない
鎮痛剤	新セデス錠	40Ｔ	1	
鎮痛・消炎剤	メナミンＳ	150㎎30Ｐ	4	セデスと同じ
降圧利尿剤	フルイトラン	2㎎500Ｔ	1	血圧も下がる。注
抗生物質	ケフラール	250㎎100Ｐ	1	炎症止め
抗生物質外用薬	アイロタイシン軟	12g	1	
皮膚外用薬	リンデロンＶＧ	5g	10	
点眼液	コンドロン	5m	6	雪眼等
〃	フルメトロン	5m	6	炎症・血膜炎
〃	サンテマイシン	5m	6	炎症
眼軟薬	フラビタミン	3g	6	角膜等。夜に
眼抗生物質	テラマイシン		2	眼の傷、化膿性
外用薬	リードパップ	20g	25	
〃	オキシフル		1	
〃	マーキュロム		1	
〃	バンドエイド	200コ	5	

薬　　効	品　　名	容量・個数	備　　考
その他	テーピングテープ	8	
	綿棒	400	
	弾力ホータイ（綿ホータイ）	13	
	ガーゼ	20	
	ハサミ	2	
	爪切り	2	
	ピンセット	2	
	体温計	各自	

6. 庶　務

○隊長の仕事のうち、雑務を手伝う。
○上記の範囲内で、中国側人員との交渉。
○飛行機による移動の際、搭乗券のチェック、席の確認など。
○成都、松潘などで、ホテルの部屋割り、荷の置き場所の確認など。
○ＢＣへの移動の際、車輛、馬などへの人員と荷の配分。
○ＢＣにて、隊長・各係間の連絡。中国側人員との連絡。テントの人員配置の確認。

私はこの仕事を勝手に「隊長のお手伝い」と考えておりました。しかし、私自身が風邪引きのため途中下山したので、その仕事はほとんどできませんでした。登頂できなかったことも残念でしたが、自分の仕事を果たさなかったということも心残りでした。しかし、よく考えてみると、この仕事については、自分でもよくわかっていませんでした。本来ならば、中国側のガイドや馬方との交渉、キャンプ設営時の準備など、仕事は色々あったはずですが、それらはほとんど、酒井隊長と山森秘書長がやってくれました。あらためて、ご両名に感謝申し上げます。　　（三輪　力）

7. ゴミ対策

◎目的

訪れる地を汚さず、当地の景観を傷つけずに残すことを原則とする。

1986年のＨＡＪ隊が残したものがあれば、可能な限り、回収、処理をする。

＜出発前に＞

○過剰包装など、不必要なものは、できるだけもちこまない。
○缶、ビンは代替物を探がす。
酒、調味料などは、ポリタンあるいはパック製品を利用する。（缶等は、現地で重宝がられることもある。）
○破損を避けるためのつめ物は、可燃物に変える。

＜ベースキャンプで＞

○使用後、不必要になったものは、可燃物、不燃物に分け、一定の場所で管理する。
○不燃物は、馬方さんや現地の人の使用に供せるものは供し、他は、缶など腐蝕するものは極力小さくして土中深く埋める。ビン、乾電地等はもち帰る。
○可燃物は、それだけで処理せず、テープ、ビニール等燃えにくいものの燃料としても利用する。

○残飯は極力出ぬよう努める。
でた場合は、一定の場所で乾燥させた上で、燃すなり地中に埋める。
○一日一回、定時（夕食後）に処理する。

＜C1にて＞
○不燃物、可燃物共、BCにもち帰り処理する。
○排泄物は、一カ所で行い、撤収時は、きちんと埋められるようにする。
○ロープ等も極力回収する。

＜BC撤収に際して＞
○ゴミの処理は早めに行う。
○BC周辺をもとの状態にもどす。
○予備食、もち帰り不要品は、できるだけ馬方さん、連絡官などに使っていただくことを考える。　（江尻健二）

8. 準備日誌

『麗しき四川の夏』雪宝頂登頂に向け、約半年間種々の準備を重ねました。ここでは、隊員間の意思の疎通を図ることを第一の目的として発行された雪宝頂通信を摘録する。

雪宝頂通信No.1　2/13発行

1. 第1回合宿報告

日時　2月2日（土）19時～3日（日）11時
場所　HAJルーム
出席　酒井、江尻、三輪、森山、久保、合田、（事務局：山森）
議事・自己紹介
・HAJ登山隊の基本姿勢と国内山行について（山森より）。当隊もその線で運営される。
・隊の構成について（酒井）
3月末までは希望者があれば隊員とする。
・懇親会。各隊員より隊参加の動機が披露された。
・役割分担は以下の通り決定（○印チーフ）
渉外○酒井　登攀○森山
装備○森山、合田　梱包○久保、森山
食糧○合田、江尻　輸送○久保
記録○合田、江尻　気象○合田、江尻
通信○森山　医薬○三輪
ゴミ○江尻、合田　庶務○三輪
歌集○江尻
・今後の準備日程
5/3～6　富士山合宿、係森山
6/29～30　梱包、ミニヤ・コンカ隊の荷と一緒に送る予定
7/6午後3時～　合同家族会、壮行会
東京定例集会（関東在住者で決める）
※物資関係は、無料寄贈依頼を基本として各係りを中心に実施する。

2. 第2回合宿通知

日時　3月2日（土）19時～3日（日）17時
場所　2日酒井宅、3日別紙オリンピックセンター
議事　2日　各係り基本計画の発表と検討
3日　東京都山岳連盟主催「高所順応研究会」参加
※　合宿参加の有無を酒井まで連絡して下さい。集合場所等は後日連絡します。
「高所順応研究会」の参加は各自、直接都岳連へ申込の事。

3. その他

HAJの登山隊に参加する場合は、当登山隊が独立して存在する訳ではありません。同時に進行している他の登山隊の動向やHAJそのものの動向にも充分に関心を注いで下さい。
同様に、登山の現場となる中国の動向や、周辺の動向なども重要な要素となりますので、勉強を積み重ねて下さい。

雪宝頂通信No.2　2/22発行

1. 第2回合宿について

日程　①3/2（土）酒井宅で打ち合わせ

②3/3（日）「高所順応研究会」参加

※3/2打ち合わせ参加の方へ

(イ) ＪＲ取手駅西口改札口へp.m.6：30集合

(ロ) （省　略）

(ハ) 各自担当の係の原案を持ってきて下さい。

(ニ) シュラーフ、食事はこちらで用意します。

(ホ) 3日は6時起床、7時出発

※3/3のみ参加の方へ

(イ) 各自参加申し込みを

(ロ) 各自指定の場所へ集合

※①または②不参加の方へ

(イ) 各自担当の係の原案を酒井宅へ送って下さい。

雪宝頂通信No.3　3/28発行

1. 第2回合宿報告

予定通り合宿が行われた。参加者は酒井、江尻、三輪、森山、戸部、久保、中居の7名。

2. 新隊員について

第1回合宿の時点では隊員は6名でしたが、その後下記の方が隊員となり現在の隊員総数は11名になっています。各係の数量計算は11名でお願いします。

平川宏子　中島睦美　戸部秀男　柏倉秀克
中居満穂

※尚、以後も4月末までは希望者がある場合は参加を認めたいと思います。隊員数が13名以上になった場合は、ＨＡＪから秘書長として山森専務理事が参加する予定です。（この時は、中学2年の山森直樹も参加します）

3. その他

5月合宿は富士山の予定です。詳細は後日連絡します。

雪宝頂通信No.4　4/8発行

1. 第3回合宿計画について

以下の計画は、4/1（月）、隊長酒井と登攀係森山が、ＨＡＪルームにて会合して決定したものです。

期日　5/3～5/6、全日参加できない隊員も、可能な限り参加して下さい。

場所　富士山（ＢＣ、5合目佐藤小屋付近）

日程　5/3　ＢＣ集合、打ち合わせ
自己紹介、各係分担の確認と報告、今後の予定、歌集案ならびに練習

5/4　7～8合目にて技術の打ち合わせ
フィックスロープの張り方及び使い方

5/5　頂上往復、希望者は頂上泊

5/6　朝下山

準備　共同装備・食糧の分担、個人装備

※　食糧費用の目安は、一人一食4～500円

※　懇親会用のアルコールは、各人の実力に合わせて、各人ご用意を

2. 今後の予定

① 5/25（土）ＨＡＪ総会

② 6/9（日）ＨＡＴ－Ｊ清掃登山（丹沢）

③ 6/28～30 ミニヤ・コンカ隊梱包、雪宝頂隊も共同装備、食糧、個人装備の一部を送る。

④ 7/6（土）ＨＡＪ派遣3隊合同家族会議、壮行会

雪宝頂通信No.5　4/24発行

1. 隊員の変更等

☆　中島睦美隊員は、体調を崩し雪宝頂隊参加を断念しました。

☆　ＨＡＪ専務理事・山森欣一氏秘書長として同行。また、長男の直樹君（中学2年生）も同行します。

2人の同行目的は、ＨＡＪで来年以後企画しております、中国の高原・山岳地帯をフィールドとした、少年冒険学校（仮）の可能性を探ることです。

2人を加え、現在、隊員総数12名です。楽しい、心に残る山行にしたいと考えています。

隊員各位の心配りで、有意義な一夏を過しましょう。

2. 第3回富士山合宿について

参加者　酒井、江尻、平川、三輪、森山、戸部、柏倉、中居、合田（以上全日）

▼5月合宿（富士山頂）

久保（3、4日のみ）
他に柏倉さんの友人1人参加予定

日程　5/3（金）新宿集合　酒井、江尻、森山、戸部、中居、合田、久保
車3台で出発
ＢＣ集合　平川、三輪、柏倉、友人

共同装備の準備について

雪宝頂通信No.6　6/1発行

1. 隊員の追加について
5/25のＨＡＪ総会時、新たな隊員が1人加わりました。総数13名になりました。
隊員　小野田　靖（34歳）

2. 隊荷の梱包について
日　時　6/29（土）～30（日）
ミニヤ・コンカ隊は28日から泊り込みでしますが、我々は夕方から始めます。
参加者　可能な隊員
梱包品　食糧……当日までに間に合う物
装備……成都デポ品の不足品（例フィックスロープ）
個人装備……登山靴、寝袋、ピッケル
※直接持参するか、あらかじめルームへ送って下さい。
その他　梱包は中型プラパールボックスに個人装備を入れ、空いた所に食糧・ロープなどを詰める。
マーキングはコンカ隊とし、アナカンで送る。

3. 出発時持っていく物
4. 現地関係

雪宝頂通信No.7　7/23発行

1. 最終出発案内
出発日時　8月1日（木）10時30分　成田発
全日空905便　北京行
搭乗手続　箱崎シティターミナル1Fカウンター前に午前7時集合
各自個人装備を持参のこと。パスポート、チケットは山森が持参。
箱崎にて一括搭乗手続きを行い、成田では出国手続きだけを行う。
ルーム宿泊　前日ルームへ宿泊する人は、食糧等を箱崎まで運んで下さい。箱崎には7時までに集合（森山担当）

2. 念書の提出について
合同家族会に親族の代表が出席できなかった隊員は、合同家族会で話し合われたことについては異議ない旨の、誓約者代表者の念書を事務局宛て提出のこと。（書式は自由）

3. その他
最近の中国の報道によれば、長江下流で大洪水が起きています。雪宝頂はこの上流になりますので、道路決壊等の事態も充分予想され、アプローチが変更になる可能性もあることを了解しておいて下さい。

4. 雪宝頂別送品梱包リスト

雪宝頂通信No.8　'92 3/21発行

1. 報告書発行について

（酒井国光）

編　集　後　記

『今、何故、雪宝頂なのか…』
入山前、隊員が自分自身に問いかけた命題である。
その答えとなるキーワードのいくつかは、本登山隊の計画の趣旨の中に見いだされる。
「岷山山脈の最高峰」「チベット民族の聖山」
「ピラミダルな山容」「短期間の高所登山」
「アプローチの容易さ」「経費の手頃さ」
「ＨＡＪの初登頂の山」「安全登山」「登頂」
「自然環境の保全」「友好親善」等々

＊

そして、その登山は終わった。今、さらに問いかける。
『何故、雪宝頂だったのか…』と。

その答えがこの報告書であると言ったら言い過ぎであろうか。少なくとも、その答えを出したいという編集の意図だけはあったのだが、どれだけそれを実現できたか多大の悔いが残る。
拙い文章の中から『我々の雪宝頂』を読み取っていただければ幸いである。

＊

最後に、この登山が円滑に進むように裏から支えてくれたＨＡＪ事務局の方々、'86年雪宝頂隊隊員の方々、四川省登山協会を初め関係諸機関の方々、その他、有形無形のご協力をいただいた皆様に、本書面をもって厚く御礼申し上げます。

（酒井記）

麗しき四川の夏
'91雪宝頂登頂の記録

発　行　1992年12月1日
発行人　ＨＡＪ'91雪宝頂登山隊
編集人　酒井国光
発行所　日本ヒマラヤ協会
〒169 東京都新宿区高田馬場 3－23－1
淀橋食糧ビル 506号
03-3367-8521